2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名	農学研究科
学部長・研究科委員長名	上原　万里子
学科名・専攻名	農学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	□　している ☑　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づく授業科目の設定を行っているが、農学専攻は各研究室がそれぞれの専門学会分野にあたり、専門領域が非常に広範、多岐に渡るため、授業科目・内容についての見直しについては苦慮しているのが現状である。	本年度実施の研究科全体院生ポスター発表会への原則全員参加に加え、これまでは分野内での院生発表会だったのを本年度は専攻全体でM1、D1を対象としたポスター発表会を実施した。実施後の聞き取りでは、異分野の発表をお互いでディスカッションすることで非常に刺激を受けたという声が多。	シラバスを作成し、基準を順守して成績評価を行った。学位授与についても規定に従って実施された。	科目評価では成績により、演習科目ではプレゼンテーションを中心に発表内容の総合的な評価を実施している。学位論文については準備、実験、執筆について指導教員が適宜チェックし、最終的な学位論文完成、発表までの過程を専攻内で把握できるよう発表会を実施している。	教育課程及びその内容、方法について、専攻内会議で随時問題点をチェックし、全教員内で情報共有を図り、改善・向上に努めている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・植物生産、植物病理、機能開発、ポストハーベスト、昆虫学など多岐に亘る内容の科目が開講されている。	【長所】 多岐に亘る分野をもつ専攻の特徴を生かし、プレゼンテーション能力、理解力を高めている。	【長所】 特論、演習科目により各自の専門性を、選択科目でより広い農学関連の知識を習得できる。	【長所】 中間報告などを通して学習状況、進行状況を随時把握できている。	【長所】 本専攻は広い学問分野、学会に属する教員が所属し、様々な情報が共有されている。
	【特色】 ・各分野の基礎的な内容である特論科目に加え、演習科目でより深く、応用的な内容が提供されている。	【特色】 多岐に亘る学会で活躍する院生が一堂に会し、発表・議論する場である。	【特色】 演習でのプレゼンテーションを通じて、思考力、問題解決能力の向上を図っている。	【特色】 専攻内の広い分野に属する教員がそれぞれの学位論文の進行状況をチェックできる。	【特色】 広い学問分野、学会に所属する教員により構成される専攻で、多面的な考え方が共有されている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・開講科目全体の位置付けや基礎と応用の関連性などの検討が未だ不足している。	【問題点】 開催時期や開催方法など、事前アナウンスが遅れ、発表者に少なからず負担をかけた。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 ・学部改組に伴う科目内容の検討が今後の課題に挙げられる。	【課題】 年次計画の中に組み込み、発表者がスムースに取り組めるようにする。	【課題】 なし	【課題】 次年度から始まる複数指導体制への具体的な対応。	【課題】 なし
根拠資料名					

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

2．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	前年度から推薦入試による学生の選抜枠を大幅に拡大し，受験希望者への周知を図ることができたことから、専門性を重視したかたちでの入学者選抜を行うことができた。	年に 3 回（推薦，I 期および II 期）行われる入試時期に，その時の状況等について教員間でのディスカッションを行い，適切性について十分な取り組みを行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・遅くとも研究室配属がきまる学部 3 年次のころから，大学院進学に関する情報をあたえることができ，より意欲の高い学生に早期のうちに高いレベルに引き上げることができている。	【長所】 ・入試の回数が多いため，必然的に入試の実施について検討する機会が増加する。
	【特色】 ・学部在籍の早いうちから，より高度な専門教育や研究をめざす人材を発掘することができている。	【特色】 ・多数行われる面接等の機会により，学生の研究意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・比較的早期（推薦および I 期）のうちに入学枠の大半を満たすことになるため，II 期の時点で優秀な学生を取り損なう可能性がある。	【問題点】 ・早期に実施される入試（推薦および I 期）においては教員側の意欲も高いことが多いが，II 期の時点になるとやや意識が低下する可能性がある。
	【課題】 ・定員枠を上回ることをあまり気にせず，優秀とみなされた学生については、全体的な総枠に対する在籍数を勘案しながら、積極的に選抜していけるようにしたい。	【課題】 ・教員側も常に次代の研究者を育成するという使命をよく心得て，常に意識を高く保てるようにする必要がある。
根拠資料名		

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☐　している ☑　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	農学専攻内の専門分野ごとに，適切な人材が配置されるように心がけている。	大学院が独立した存在ではなく，どちらかといえば学部の上の付属物的な形での存在であるため，どうしても学部における教員組織の充実が先行する傾向にある。	複数指導体制に向けて、順調に昇格人事を進めており、同一専門分野における複数教員による体制が整備された。	専攻内の専門分野が多岐にわたるため，組織的な対応が行われているとは言いにくい面もあるが，できる限り内部での昇格者を登用するなど，組織の充実に努めている。	必ずしも定期的な点検は行っていないが，学部再編等による教員の異動が予想されるため，適切な組織体制の維持・構築に向けて検討を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・種々の教員による専門的な指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編制が充実すれば，それに伴って大学院の組織も充実する。	【長所】 ・若くて優秀な指導教員の出現により，当該分野における進学者を多数確保できた。	【長所】 ・内部昇格者は専攻内の現状に通じており，今後の発展性についても適切な判断が下せる。	【長所】 ・学部再編による大きな異動があらかじめ予想されているので，これに対応して組織の適切性を検証できる。
	【特色】 ・同じ専攻とは思えない多様な人材を育成可能である。	【特色】 ・教員歴の長い経験豊富な指導教員を配置することができる。	【特色】 ・各専門分野において新進気鋭の研究者を確保している。	【特色】 ・学部学生時代から継続的に指導体制を整えることができる。	【特色】 ・現状における人材登用予定分野が明確である。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・改組に伴い専門分野内の教員数を十分に確保することが困難な場合がある。	【問題点】 ・短期的な状況変化に対応することが難しい。	【問題点】 ・指導体制が整備されたものの，一部の分野で複数体制による指導(准)教授の配置ができていない。	【問題点】 ・常に内部昇格者を確保することができるわけではなく，分野によっては厳しい状況にあるところも見受けられる。	【問題点】 ・人材を補充すべき分野は明確であっても，有資格者を簡単に確保することはできない。
	【課題】 ・ある程度長い目で見て専門分野ごとの教員の育成を図る。	【課題】 ・外部からの人材導入も含め，時につなぎ的な人事体制を構築する必要性も考えられる。	【課題】 ・各分野において，できる限り昇格者による指導体制構築が求められる。	【課題】 ・学部人事の編制に際しても大学院組織のことを十分に考慮してもらうよう配慮をお願いする。	【課題】 ・内部登用だけでなく，一時的には外部からの適格者の確保が必要である。
根拠資料名					

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　畜産学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　講じている ☐　一部講じている ☐　講じていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学院講義の内容・重複など、これまでのカリキュラムを見直し、カリキュラムの改正を実施し、研究室ごとの機関科目を中心に、外部講師による特別講義などを新たに配し、平成 30 年度から運用を開始している。	畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定している。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展を知り、多重なサポート体制を作り、切磋琢磨する環境を整備している。	各教員が成績評価を適切に実施し、学位取得のための口頭発表審査会は専攻内の指導教授全員が出席できる日程を選定し、全体で学位授与の決定を実施している。	大学院に進学した時点で、専攻説明会において学位授与方針を説明している。また、年２回の畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションにより、担当指導教授以外にも複数の専攻内の教員で学習成果を把握、評価している。	授業担当者は大学で実施している授業評価アンケートの結果を考慮し、講義内容の改善や向上を試みている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 畜産学に関するより幅広い最新知識を得られるようにしている。	【長所】 専攻教員全体で大学院生へのサポートが可能である。また、研究室外学生との交流により、新たな発想を得る機会となっている。	【長所】 偏りの無い評価を行うことができる。	【長所】 特になし	【長所】 担当者をできる限り複数にすることで、自己点検のみならず教員相互の点検が可能となる。
	【特色】 特別講義を多く実施することで、畜産の専修分野を幅広く俯瞰した最新の専門知識の習得が可能になった。	【特色】 大学院生同士のディスカッションにより、切磋琢磨できる。	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	◆大学院シラバス、◆大学院学生便覧、◆履修ルールやモデル、◆特別講義実施記録、◆専攻３ポリシー	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆大学院シラバス、◆学位論文審査基準、◆口頭発表審査会実施記録	◆専攻説明会実施記録、◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録、◆専攻３ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学院入試説明会の際、大学院進学希望学生全員に対し、アドミッション・ポリシーおよび入試制度について説明をしている。 入試の点数や順位などは、指導教授全員で確認を行い、公正に実施している。 推薦入試制度について、31 年度は実施時期が５月となり、学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難と考え、行わないこととした。	I 期およびⅡ期入試時には指導教授相互に情報公開とディスカッションを行っている。 推薦入試については実施時期の早期化により学生の適正を見極めることが困難であること、GPA に下限を設けると農業高校出身者や、万能ではないが専門に優れており、進学後に成長が見込まれる者を救い上げることが出来なくなり、当専攻が考える推薦入試のメリットが無くなると考え、一旦停止している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 2 回の入試を行うことで現状、定員を満たすことが出来ている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 畜産学専攻では推薦入試制度を導入したが、入試実施時期の早期化により学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難と考え、一旦停止している。学部 3 年生の時点で学生の資質を評価し、推薦に値する者を見極めることは困難である。	【問題点】 現状では定員を満たしているが、学部改組により学部生数が減少していることもあり、このままでは 2022 年度進学希望者の減少が危ぶまれる。
	【課題】 推薦入試制度の復活を検討する	【課題】 院生確保のためより現状より早い時期から学部生への大学院進学を意識させ、推薦入試を再開させる必要がある。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆専攻３ポリシー、◆大学院入試説明会の実施記録（参加者数等含む）、◆大学院入試志願者数表	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆研究進捗プレゼンテーション実施記録

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　つなげている ☑　一部つなげている □　つなげていない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	各専門分野に適切な人員を配するとともに、若手教員が大学院授業担当者に昇格できるよう、各指導教授および若手教員自身に積極的に周知している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	大学院授業担当者を増やすことで、大学院教育研究活動の更なる向上を目指している。	専攻の各指導教授に対し、昇格申請の案内を積極的に実施している。今年度は１名が指導教授に昇格している。	年に２回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションを行っている。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握し、院生に対する教員の指導が適切に行われていることを確認する機会としている。	学部再編に伴い、できる限り適切な人員配置になるよう努力した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 各分野に専門性の高い教員を組織できる	【長所】 同一分野に職階の異なる複数教員を配置できる	【長所】 特になし	【長所】 継続した資質向上を見極めることが出来る。	【長所】 特になし
	【特色】 幅広い分野に対応する教員が確保できる	【特色】 数十年単位で同一分野の研究活動を継続することができる	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 年齢構成がうまくいかない場合がある	【問題点】 最適な人材がそろわない場合がある	【問題点】 特になし	【問題点】 学部の編成が優先されるため、本専攻にとって必ずしも最適の人材を確保できていない。
	【課題】 特になし	【課題】 年齢構成の是正を図る	【課題】 昇格が停滞する場合には外部から臨時の指導体制を構築するなどし、昇格を促すとともに、教員候補となる学内出身者の育成が必要である。	【課題】 特になし	【課題】 専攻教員全体で議論し、組織の適切性を判断し改善できる場を設定する必要がある。
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針、◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　バイオセラピー学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	■　している □　一部している □　していない	■　講じている □　一部講じている □　講じていない	■　行っている □　一部行っている □　行っていない	■　している □　一部している □　していない	■　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	バイオセラピー学専攻の理念の理解と会得を進めるために、専修科目の統合を進め、必修科目の特論および選択必修科目の演習を設定した。 学生主体のセミナーおよび教員セミナーの定期開催	各専修において実験・実習を充実させるために新たな実験・実習科目（バイオセラピー学発展実験・実習 4 単位）を設定し、必修科目に設定した。またプレゼンテーション I、II については修得方法を明示し、学生の発表能力の向上を進めた。 学生主体のセミナーおよび教員セミナーの定期開催	各年度始まりの専攻ガイダンスにおいて新入生および在学生に講義、演習、実験・実習科目の内容について説明し、単位の取得について説明を行った。単位認定と学位授与の評価については、専攻内で大学院セミナーを開催し、専攻全体で各学生の研究の進捗状態を把握し、さらに中間発表会により適切な指導および評価を実施した。	大学院セミナーを開催し、専攻学生全員の当番制の発表を実施した。これらの参加および発表によりカリキュラムに設置している科目（プレゼンテーション一 I）を単位認定し、評価を行った。また中間発表会を 1 年次終了前に実施し、研究の評価を行い、単位として認めた（プレゼンテーション II）。	学生の研究動向を適切に理解し、指導するために専攻内独自に大学院セミナーを開催した。学生は必ず発表および討議に参加することを義務付け、研究状況の把握を行い、専攻全体で各学生に適切な研究・教育指導が行われているか、点検・評価した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ディプロマ・ポリシーの内容に一致する学問体系作りが進められた	【長所】 学生が専攻した専修について、総合的に理解を深めることができた。客観的な発表能力が向上した 学生への研究理念の構築、展開について論議できる 各教員の研究内容・理念を専攻教員および学生が共有化できる	【長所】 セミナー開催により指導教授との研究打ち合わせ、発表に対する意見を聞くことができる。 各自の専修以外の教員の意見を聞くことができ、専攻全体で各学生の研究内容を把握できた	【長所】 ディプロマ・ポリシーに配慮した単位取得が可能になった 専攻全体で専攻の理念を再確認し、セミナーによる討議により、問題点が明確化する	【長所】 適切な教育指導が行われているか、専攻で把握できた 指導学生以外の研究の理念を理解でき、修士論文の研究の方向性を専攻全体で共有できる
	【特色】 専攻学生全員が全専修科目を学ぶことによりディプロマ・ポリシーを達成することが可能になった	【特色】 専攻および専修の理念をより明確にすることできた 学生と教員の研究理念の共有化	【特色】 専攻における理念の共有化ができる 研究の質の向上および進捗状態を専攻全体で理解できた	【特色】 学生が常に研究に対する問題意識を持つことが可能になった 研究室所属学生以外の研究状況の把握ができ、専攻の理念の方向性を確認できる。	【特色】 学生の研究状況のみではなく、健康状態など FD に関わる状況を把握できる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 セミナーへの学生の出席率 セミナーへの教員の出席率	【問題点】 農学部改組により組織変更に伴い、当専攻の廃止が、専攻教員の教育・研究への意欲を希薄化している 専攻の消滅による教員の意識のつなが	【問題点】 満足度アンケートによる結果より、図書館やその他の施設などへの不満

				りの消失	
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 専攻の教員および学生のセミナーへの意識と開催曜日の調整 教員の教育・研究以外に割く時間が多すぎる。 儀式化された書類作成など	【課題】 学生と教員が共有できる時間の減少 教員に負荷される雑務の多さ 儀式化された書類作成	【課題】 世田谷と厚木キャンパスにおける様々な環境格差（事務職員の人数および質） 学生に対する事務職員の対応の質
根拠資料名	◆専攻会議議事録（資料 5）、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆大学院カリキュラム、◆専攻３ポリシー、◆各セミナ出席状況およびレジメ（資料１）	◆専攻会議議事録（資料 5-1、5-3）、◆大学院学生便覧、◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、◆満足度アンケート、◆各セミナ出席状況およびレジメ（資料１）	セミナー開催記録（資料 1）、◆専攻ガイダンス実施記録（資料 4）、◆中間発表会実施記録（資料 2）	セミナー開催記録（資料 1)、◆中間発表会実施記録（資料 2)、◆専攻３ポリシー	セミナー開催記録（資料 1）、◆専攻会議議事録（資料 5）

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	■　している □　一部している □　していない	■　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	学部改組によるバイオセラピー学科の廃止に伴い、当専攻の最後の入試の実施 新学科の大学院開設による教員の移動 当専攻の指導教授の確保と運営 大学院セミナーを開催し、学部学生に対して大学院進学希望者の確保を進めた 試験科目の選択に当たっては、受験生の科目の選択肢を増やすために各自の専修科目を必修一科目のみとし、受験に取り組みやすくした	バイオセラピー学科の募集停止により、専攻の運営が今後の課題である。 アドミッションポリシーに沿って、入学前に専攻内の研究教育指導の状況を理解させるために、学部学生にも聴講できる大学院セミナーを開催した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 大学院セミナーに学部新学科の学生の参加 入試試験科目の削減により、受験生の負荷を軽減できた	【長所】 専攻の理念の確認と洗練化を図ることができる 学部学生から専攻の理念を理解させることができる 専攻の研究・教育の質の保証
	【特色】 受験科目の削減により他学科からの受験がしやすくなった 多様な学生の受け入れができる	【特色】 学部学生に大学院への進学意欲の向上 多様な学生の受け入れ
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 今後の専攻の維持をどのように行っていくのか 教員の配置 学部改組による研究室の消滅、専攻学生の意識	【問題点】 今後の専攻の維持をどのように行っていくのか 教員の配置 学部改組による研究室の消滅、専攻学生の意識
	【課題】 改組に伴う消滅研究室における学生の意識 新学科学生と旧学科出身の専攻生との協調性の維持	【課題】 改組に伴う消滅研究室における学生の意識 新学科学生と旧学科出身の専攻生との協調性の維持
根拠資料名	◆専攻会議議事録（資料 5）、◆大学院入試関係（資料 6）、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆セミナー開催記録（資料 1）、◆専攻３ポリシー	セミナー開催記録（資料 1）

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	■　している □　一部している □　していない	■　している □　一部している □　していない	■　している □　一部している □　していない	■　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	■　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	学部学科の理念に適った教員配置に基づき教員を研究室に配置している。 1. 農学を基盤とした生き物・環境・人とそれらの関係性に関する理解を有する教員 2. 人の健康と福祉に資する福祉農学の発展に寄与する意欲を備えた教員	農学部改組による教員再編成に伴い、新たな指導教授および授業担当者を配置した。	農学部改組による教員再編成に伴い、新たな指導教授および授業担当者を配置した。	大学院学生セミナーおよび教員セミナーの開催	研究室間の研究理念および内容の相互理解を進めるために大学院セミナーを活用した
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 学際的な要素が強い教員組織編成ができた	【長所】 専攻内での研究教育の質の確保ができた	【長所】 専攻内での研究教育の質の確保ができた	【長所】 教員間で研究理念を共有できた	【長所】 研究室の枠を超えた研究および理念を理解できた
	【特色】 多彩な人材からなる教員	【特色】 専攻の理念に沿った教育体制が整う	【特色】 専攻の理念に沿った教育体制が整う	【特色】 学際分野の教育研究理念の共有	【特色】 専攻および専修の教育・研究方針の理解が深められた
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 教員の中途退職や定年退職による教員の減少	【問題点】 指導教授退職後の指導教授の確保	【問題点】 指導教授退職後の指導教授の確保	【問題点】 セミナーへの出席率が低い	【問題点】 農学部改組により組織変更に伴い、専攻教員の共通した理念の希薄化
	【課題】 教員の補充が無い中での教育・研究の質の維持	【課題】 指導教授の確保および授業担当教員の配置	【課題】 指導教授の確保および授業担当教員の配置	【課題】 セミナーの出席率を上げること	【課題】 大学院セミナーへの教員の積極的な参加
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針（資料 7）	◆専攻の教員編成方針（資料 7）	◆専攻の教員編成方針（資料 7）	◆セミナー開催記録（資料 1）	◆セミナー開催記録（資料 1）

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　バイオサイエンス専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　講じている ☐　一部講じている ☐　講じていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	特論・特論実験・特別演習・特別実験・特別研究の必修科目のほか、分野横断的な選択科目（生命情報科学・分子細胞生物学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。特に分野横断型選択科目については、積極的に学外の第一線の講師を呼んで、講義を行っている。	教員、学生間また学生同士の交流を活性化するため、ポスター形式による専攻全体での中間発表会、懇親会などを行っている。	学生の活動率評価、中間報告会、修論発表会等により評価する。	研究室毎のゼミ、授業の習熟度および、専攻全体の発表会に基づき評価している。	研究室毎のゼミ、授業評価等に基づき、全所属教員により定期的に点検・評価し、その結果について専攻会議で慎重に議論し、教育課程の内容と方法を決定している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 先端研究の知識、技術を身につけられる点。	【長所】 学生自身の自主性を尊重する点	【長所】 特になし	【長所】 グループだけでなく個人とのディスカッションを通じてきめ細かな指導を行っている。	【長所】 特になし
	【特色】 外部講師等、学外の情報も積極的に取り入れられる点	【特色】 学部からの内部進学生が多く学生間の交流が活発な点	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院カリキュラム、大学院学生便覧、大学院シラバス、学外講師一覧、専攻 3 ポリシー	中間発表実施記録、懇親会実施記録	中間発表実施記録、修論発表会実施記録	専攻全体の発表会実施記録、専攻 3 ポリシー	

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	アドミッショ・ポリシーに基づき、生命科学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている．大学院進学後に必要な学力を評価するために分子生物学、英語を試験科目として科しており、これらの筆記試験に加え、複数の教員による面接を実施している。全ての科目の試験後に専攻長を中心とした専攻教員全員による入試判定委員会により公正かつ客観的に選抜している。	試験後に選考会議を実施し、専攻の教員で十分に議論した上で選抜する。また研究室毎のゼミだけでなく、中間発表会より専攻全体で適切性について判断する。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 受験生とは選抜試験前からコンタクトを取り、進学後や卒業後の進路についてディスカッションを行っている。	【長所】 一人の学生の教育に複数教員が関与するため公正に点検、評価できる点
	【特色】 面接では専門知識だけでなく人柄も確認できる。	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院入試募集要項、専攻３ポリシー	中間発表実施記録

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　つなげている ☐　一部つなげている ☐　つなげていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	設置の趣旨に基づき、学科の専任教員を配置している。専任教員の採用は、原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢などの資質を明記している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	指導教授として文部科学省の設置基準を上回る教授 13 名を配置しており、十分な教育、研究指導を行うことができる。	専攻の教授により構成される人事委員会により以下の根拠資料に基づき実施している。	自己教育評価、授業評価により、授業、研究指導、国際交流、大学運営、課外活動、学外活動を評価している。また、全学的な FD 委員会にも参加をしている。また教員全員が原則として科学研究費補助金をはじめとする外部研究資金に申請することにしている。	学部改組に伴い、本専攻の教員組織に関しても教員体制を変更した。動物、植物、細胞分子機能の 3 分野の体制は維持し、それぞれの分野を専門とする教員を配置した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 生命科学の幅広い分野を網羅できる教員の配置	【長所】 動物、植物、細胞分子機能の 3 分野にバランス良く教員を配置している点	【長所】 人事委員会による教員体制の定期的な確認	【長所】 外部研究資金の獲得推進	【長所】 3 分野に各 2 研究室というバランス良い教員体制
	【特色】 同上	【特色】 適切な年齢、職位バランスを考慮した採用、昇任を行っている点	【特色】 各活動の点数化による明確な昇格目標の提示	【特色】 外部研究資金への申請	【特色】 複数の女性教員の配置
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	学科（専攻）教員配置表	学科（専攻）教員配置表	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	科研費等外部資金申請状況	学科（専攻）教員配置表

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　農芸化学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　講じている ☐　一部講じている ☐　講じていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	特論・演習・実験科目のほか、分野横断的な選択科目（生体機能化学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。新研究科への移行に伴い、いくつかの講義が変更・追加されるが、上記の重要な科目は引き継がれる。	大学院生への教育・研究支援は、所属研究室におけるセミナー、個別指導などを通じて手厚く行っている。	学生の研究活動、講義科目の成績、発表会などから総合的に評価している。	所属研究室における定期的なセミナー、専攻全体での中間発表会、および最終発表会などを通じ、継続的に学習成果を把握している。	評価アンケートの結果や各研究室の現状教員間で共有し、会議の場で議論するとともに、継続的な改善に努めている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 最新の知見や研究手法のインプットから研究発表によるアウトプットまでを総合的に身に着けさせることができる。	【長所】 研究室教員と各院生間で定期的にディスカッションをしており、研究だけでなく生活面のサポートも可能である。	【長所】 なし	【長所】専攻全体での発表会では、他分野の教員との議論も加わり、研究課題に対するより本質的な理解につながる。	【長所】 なし
	【特色】 外部講師による講義も豊富で、学外の情報を積極的に取り入れられる。	【特色】 研究室規模が比較的大きく、学生間での情報共有や切磋琢磨する機会にも恵まれている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻３ポリシー			中間発表会（資料 A）、および最終発表会（資料 B）実施記録、◆専攻３ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑ している □ 一部している □ していない	☑ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する現状説明	アドミッショ・ポリシーに基づき、農芸化学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康に関わる課題解決に取り組むことができる学生を求めている．大学院進学後に必要となる学力を評価するため、分子生物学、選択科目（有機化学または無機化学）、英語を試験科目としている。これらの筆記試験に加え、大学院指導教授による口頭試問により評価している。合否判定については、会議において、厳正・公平な審査を行っている。２期入試受験者に対しては、口頭試問において、卒論研究に関するプレゼンテーションを行うことで適正を測っている。	試験後の選考会議において、専攻の教員間で十分に議論し、学生選抜の適切性を担保できるよう努めている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 学力だけでなく、研究に対する意欲や卒業後の進路に対する考え方を含めて把握することができる。	【長所】 専攻全体で審査が行われるため、公正な点検、評価が期待できる。
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆大学院入試募集要項、HP 等、◆専攻３ポリシー	

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	□　している ☑　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各研究室に必要な人数の教員が在籍し、各教員の専門分野も専攻の専門性に沿っている。 採用時の面接で教育や研究に関する適正を測っている。	今年度の新規募集は予定されていない。昇任については、大学の審査基準に照らして適切に行われている。	FD セミナーなどに教員が積極的に参加している。留学制度を利用した教員の海外留学も推進しており、今年度１名が留学した。また、他大学・民間企業等との共同研究（63 件）や外部資金獲得（30 件、うち科研費 5 件）を積極的に行っている。	日常より専攻主任・学科長を中心に教員組織の編制について話し合いを行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 外部資金獲得による研究教育環境の充実	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 各活動の点数化による明確な昇格目標が提示されている	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	学科（専攻）教員配置表（資料 G）	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	共同研究及び外部資金獲得状況（資料 F）	

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　醸造学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	特論科目と特別実験・特別実習を適切に組み合わせている他、プレゼンテーション法など、醸造学の学位授与方針に掲げた能力を身に着けるための教育課程を編成している。	中間発表会はポスター形式で行い、専攻内学生間、および学部学生や教員とのディスカッションや学術交流を促進している。各研究室において、指導教員との議論を積極的に行っている。	各科目の成績評価方法と評価基準、修了要件と学位審査基準はシラバスに明示されており、適切に学位授与を行っている。学位審査及び修了認定は最終プレゼンテーションと質疑の内容を踏まえて、専攻内全指導（准）教授による会議にて客観的かつ厳格に行っている。	専攻内における発表会、学会発表、学会参加状況、学術論文投稿状況等から総合的に学習成果を評価している。 なお、学会発表は 18 件、論文投稿は 14 件である。	授業評価アンケートをもとに、学生指導とその教育内容、方法の適切性を確認している。また、中間発表会の実施時期と実施形式について専攻内会議でその都度検討している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 各研究室におけるリサーチワークを特別実験・実習科目に、コースワークを特論科目とした体系的な編成としている。	【長所】 2 年次 6 月に中間発表を行うことで、まとまった研究成果についてのディスカッションが行え、具体的なフィードバックが行える。	【長所】 最終プレゼンテーションに対しては、学位授与に資するかの判断を念頭に活発な質疑が行われている。	【長所】 2 年次 6 月の中間発表において、学習成果の把握とフィードバックが行え、最終発表から評価を行っている。	【長所】 特になし
	【特色】 微生物を中心とした醸造学全体を網羅する科目を開設している。	【特色】 学生間でのディスカッションも奨励することで研究意欲が向上する。	【特色】 醸造学に関わる幅広い教員が在籍していることから、広い視点からの評価が行えている。	【特色】 醸造学に関わる国際的な雑誌の中でも、IF が高いもの（3.78、3.57）への掲載も達成している。	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 新研究棟におけるポスター発表の場所と方法の検討が必要。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 次年度の新カリキュラムではオムニバス形式の科目があることから、担当教員間で内容に関する適切なすり合わせが必要。	【課題】 新研究棟では研究室間の距離が近いことから、より活発な研究室間学術交流が期待できるため、具体的な方策の検討が望ましい。	【課題】 次年度より最終審査の評価基準が変わることから、適切な評価と単位認定が求められる。	【課題】 特になし	【課題】 新カリキュラムの 1 年目となることから、その内容、方法についての点検・評価について、全体的な取り組みが必要である。

根拠資料名	◆専攻３ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、	◆中間発表会の連絡(資料基①)	◆大学院シラバス、◆最終プレゼンテーション実施記録(資料基②)	◆発表会実施記録(資料基①、資料基②)、◆学会発表及び学術論文投稿状況等(資料基③)、◆専攻３ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書、◆専攻会議議事録(資料基⑥)

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	今年度より新しく始まった、推薦入試制度を５月２３日に適切公正に実施し、４名が合格者した。その他、大学院１期入試及び２期入試については、アドミッションポリシーに即した基礎学力を評価するため生物化学（一般および微生物生理）と英語を入試科目とし、公正に選抜を実施した。 来年度より新研究科となることについて、学生の理解が十分でない可能性があったことから、学生に対する説明会を１期、２期それぞれで実施し、その中で新研究科について及びそのアドミッションポリシーについての説明をした。	本年度合格人数は、志願者数及び新研究科の定員（20 名）を考慮し、25 名とした。来年度よりカリキュラムが改変されるものの、醸造学専攻として、英語と化学が基礎となることは変わらないため、学生の受け入れの試験科目としては、従来と同じ、「英語」及び「生物化学（微生物に関すること）」が適切であるとした。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 高い GPA を基準とした推薦入試を行うことで、学部生に対して GPA に対するインセンティブを明確にできた。 成績優秀な４名の学生を、６月早い時期に進路決定できたことで、卒業論文研究に落ち着いて取り組める環境を提供できた。	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 十分な学力を有して、醸造学専攻に入学することが望ましいため、1 期試験では必ずしも定員を満たすようには合格者を出していない。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 醸造学専攻に合格したものの、他大学へ進学する学生がおり、より魅力ある専攻としてアピールできる要素を増やす必要がある。
	【課題】 推薦入試については、学部生の学習意欲を高める効果をより生かすために、低学年次学生への積極的かつ適切な周知を行うことが望ましい。新学期のガイダンスなどでも紹介する。	【課題】 特になし
根拠資料名	◆説明会案内（資料基④、基⑤）	

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない	□　つなげている ☑　一部つなげている □　つなげていない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	東京農業大学の求める教員像、東京農業大学大学院農学研究科教員組織の編制方針に基づき、醸造学専攻教員組織の編制方針を策定している。	醸造学専攻の主要科目である酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、醸造環境科学の各特論に指導教員を配置している。指導（准）教授は 12 名配置されており、十分な教育研究活動の展開が可能である。	醸造学専攻の教育・研究の将来計画に基づいて教員の募集、採用、昇格等を適切に行っている。 将来計画に基づき、２名の授業担当者が大学院指導（准）教授に昇格した。	学生課主催のハラスメント講習会、学内 FD フォーラムに積極的に参加し、教員の資質の向上を図っている。	研究室内の指導体制や教員組織体制について専攻内で議論している。学生からの聞き取り調査も行い、問題があれば対処できる体制をとっている。 大学院関連の会議報告や連絡を専攻会議だけでなく学科会議でも行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 会議の頻度が増えることにより教員組織の意思疎通の向上が期待される。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 ３研究室で助教が不在の２名体制であり、若手教員が少ないことが問題である。	【問題点】 ８月に環境科学研究室助教の蒋先生が急遽退職することとなった。	【問題点】 専攻として積極的に資質向上のための方策はない。	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 円滑な募集と採用が課題である。	【課題】 ３研究室で助教が不在の２名体制であるため、来年度、募集を行う。	【課題】 資質向上のための方策の検討が必要である。	【課題】 特になし
根拠資料名					◆学科会議議事録(資料基⑦)

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書　　様式 1

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　食品栄養学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	前期課程では、公表している教育課程の編成・実施方針に記載された（1）、(2)、および (3) の各項目全ての授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力を涵養している。後期課程は、公表している教育課程の編成・実施方針に記載された（1）の項目に記載された授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力の向上に向けて適切に運用されている。	先端関連分野における外部機関所属研究者を招いた特別講義を開催し、研究の活性化を促進している。	卒業・修了要件に関しては、学生便覧等に明示している。論文審査に関しては、修士は「公開審査会」、さらに合議制の「専攻内審査会」により審査を実施・承認している。博士学位論文審査は、必要な論文数を明示し、さらに、「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」開催による審査を実施している。審査結果は、研究科委員会で報告し、承認を受ける。	博士前期課程に対しては、教育・研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、総合的に（1）学力、（2）論理的思考、(3) 問題解決能力、および (4) コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を評価している。また、博士後期課程に対しては、研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、要求される（1）体系的知識と分析力、(2) 問題解決に向けた指導的能力、および（3）国際的な発信力を評価している。	シラバス内容を、専攻内のシラバス検討委員会で確認、検証を行い、教育の改善・向上に役立てている。また、授業評価アンケートの結果と改善策を教員間で共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	平成 31 年度大学院授業実施報告書、評価報告 2019、◆専攻 3 ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス	2019 大学院食品栄養学専攻特別講義一覧（資料 1）	大学院 農学研究科 学生便覧 2019 大学院農学研究科委員会議事録 ◆学位論文審査基準、◆「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」の実施記録（資料 2～8）	◆学位授与方針に関する評価基準（資料 9）、◆専攻内の「審査報告会」の実施記録（資料 6～8）	2019F 及び 2019L 授業評価報告書 ◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	アドミッション・ポリシーとして、入学前の (1) 学習歴・学力水準、(2), (3) 入学希望者に求める水準等の判定方法、(4) 能力を設定し、ホームページ上で適切に公開している。受験生募集は、インターネットなどにおいて学生の受け入れ方針を明示して実施している。入学者選抜制度は、学内推薦入試と学内外の受験生の公平性を担保したⅠ期とⅡ期の一般入試により適切に設定されている。入学者の選抜は、全ての入学試験において専攻内の研究指導教員より構成される入試選考委員による面接、ならびにその後の専攻主任教授を長とする入試選考委員会の公正な審査を経て適切に行われている。	学内推薦入試とⅠ期とⅡ期の一般入試の入試選考委員会において、学生受け入れの適切性について、選考委員間で十分に議論している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻３ポリシー、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試選考委員会実施記録（資料 10～12）	

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☑ 一部つなげている ☐ つなげていない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する現状説明	農学研究科および食品栄養学専攻の教員組織の編成方針は、本学のホームページ上に公開している。	教育上主要と認められる食品栄養学特論ならびに人間栄養学特論の必修の特論科目に関しては、指導教授ならびに指導准教授が担当している。また、柱科目である選択科目の特論科目に関しては、すべての科目に少なくとも 1 人以上の指導教授あるいは指導准教授が担当しているなど、適正な配置が行われている。	専攻における人事計画に沿って、「大学等の設置基準」をもとに適切な職位ごとの充足を行っている。また採用・昇格に関しては、東京農業大学教員資格審査マニュアルに則り「5 年以内の責任著者としての 3 報以上を有する」ことの取扱いなど、厳格な運用が行われている。	前学期・後学期に実施される授業アンケートの結果を大学院担当教員に回覧することで共有し、そこから問題点を抽出、適切な改善計画の策定を行ったうえで、適切に実施している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに取りまとめて、次年度以降の活動の意識付けをしている。また、専攻会議において、教員組織の適切性について、専攻教員配置表等を元に、適宜、検討を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・「5 年以内の責任著者として最低 3 報」をコンスタントに維持することが難しい点。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・中長期の人事計画のみならず、組織改革など突発的な事象にも対応可能な論文作成計画を立案する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学科（専攻）教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 13)、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧	◆学科（専攻）教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 13)、◆専攻人事計画書（資料 14)、◆教務職員資格審査基準及び関連書類	2019F 及び 2019L 授業評価報告書 ◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書	◆学科（専攻）教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 13)、◆専攻人事計画書（資料 14)、◆教務職員資格審査基準及び関連書類、2019 研究活動報告（資料 16）

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　林学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☐　講じている ☑　一部講じている ☐　講じていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	シラバスの内容の点検をしながら授業計画・内容に関する検討を実施。分野および研究室間における意見交換なども実施して体系的な編成を構築するように全教員が取り組んでいる。	研究テーマ、進め方等、大学院生との修学にあたっての協議を継続的に実施している。 大学院生への教育・研究支援は、所属研究室において手厚く行っている。	履修科目に関する授業への出席、試験、課題等を通して成績評価、単位認定を行うとともに学位論文審査を通して学位授与を行っている。さらに分野を超えた専門的知識を有する外部有識者との連携も図られつつある。	学生の修学状況を把握しながら学習成果を評価している。 専攻内の所信発表会、中間発表会および修士論文発表会などを通じ、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に差が生じないように専攻内で議論している。また、研究室内での発表によるプレゼン能力の向上を図っている。	シラバスの内容の定期的な点検、授業計画・内容の検討を通した教育の改善・向上を実施している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に寄与している。	【長所】 個別の研究の進め方・方向性等、修学の推進に貢献している。	【長所】 各専修分野を中心としながら実施することによる、より専門的な評価・認定の向上に寄与している。	【長所】 大学院生個別対応による学習成果の把握・評価の向上に寄与している。	【長所】 定期的な点検による教育の内容･指導方法の改善・向上に寄与している。
	【特色】 授業の計画・内容の向上に繋がる	【特色】 大学院生個別の状況に応じた修学の確保に繋がる	【特色】 大学院生に対する専門知識の高度化・深化に繋がる	【特色】 大学院生のテーマに合致した学習成果を適切に向上するプログラムを計画している。	【特色】 定期的な点検・評価による PDCA サイクルを通した教育の内容・指導方法の改善・向上が期待される
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 院生対応による措置から一部大学院生に十分な指導が実現しなかった	【問題点】 なし	【問題点】 フィールドや机上の学習成果に関する評価体制の差異があること。	【問題点】 なし
	【課題】 分野の一部改組があることから大学院生に対する説明を充実させる。	【課題】 複数の教員によるチームサポートの実現を構築する。	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻３ポリシー	◆院生によるレポートおよびアンケート	◆学位論文審査に関する記録	添付資料「中間・所信発表会プログラム」、◆専攻３ポリシー	◆「シラバス記載内容の第三者によるチェックについて（回答）」

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑ している □ 一部している □ していない	□ 行っている ☑ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する現状説明	入学者選抜制度や試験科目等の見直しおよび問題の難易度に関する検討を実施している。入学者選抜にあたっては他大学からの受験者に対する考慮もしながら、公正に実施している。 前期試験においては、進路が定まっていなかったり研究への魅力を感じている程度が低い学生も散見されるが、研究を積み重ねることで進学意欲が高まることも多いため後期試験における受験希望者の扱いと入学希望者の発掘にも力を注ぐ。	入学者選抜試験時に点検・評価を実施するとともに毎年、学生の受け入れの適切性について点検・評価を実施している。学部学生や博士前期課程の学生に対する進学受入れの意欲向上に向けた専攻内での相互点検も実施している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 社会情勢、経済状況に対応しながら制度・体制を整備することが大切であり、意識的に取り組んでいることは長所として捉えている。	【長所】 定期的な点検・評価による学生の受け入れに関する改善・向上に繋がる
	【特色】 社会情勢、経済状況の変化に対応した柔軟な制度・体制づくりが期待できる	【特色】 定期的な実施によるPDCAサイクルを通した改善・向上が期待できる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 研究科や専攻内の研究室分野の改組に伴う進学希望学生(特に外部)への内容の説明	【問題点】 心理的ストレスを有する大学院生の増加。心理カウンセラーによる対応を必要とする院生の把握と適切指導の判断
	【課題】 改組に伴う学位名称や分野の主たる領域、従たる領域を明確に理解してもらう広報戦略を課題として考えている。	【課題】 教員間で情報を共有しつつ、協力しながら具体的に解決していくことが必要。
根拠資料名	入試説明会の開催 ◆大学院入試募集要項、HP等、◆専攻３ポリシー	◆入試選考委員会実施記録等

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	林学専攻教員組織の編成方針を作成し、公表している。	学部改組に伴い教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻会議にて審議し、指導教授により構成される委員会にて適切に決定している。	研究室単位で発表会を行うなど、若手教員の FD 向上がみられる。 専攻独自に FD 研修会などは開催していないが、積極的に学内の FD 講習会に参加している。また、参加を推進している。 授業評価アンケート実施とその結果を適正に認識して学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに点検・評価することを奨励している。 若手教員指導体制が確立するよう研究室・分野で意識した活動を計画している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針作成による編制の明確化	【長所】 専修分野に対応した教員組織の明確化に繋がる	【長所】 会議を通した情報の共有・議論の展開に寄与	【長所】 会議を通した議論の展開に寄与	【長所】 定期的な点検・評価による教員組織の改善・向上に寄与
	【特色】 フィールドで研究指導するなど、実学性が向上した。	【特色】 フィールドで指導可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 すべての研究室が英語で指導しておらず、留学生の研究室選択に偏りがある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 論文の執筆活動が停滞している教員がいるため、論文執筆を促す必要がある。	【課題】 特になし。	【課題】 若手教員の研究力向上のため、海外留学を計画する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表、学生便覧、HP 等	専攻会議資料	専攻会議資料

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

研究科名　農学研究科
研究科委員長名　上原　万里子
専攻名　農業工学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　講じている ☐　一部講じている ☐　講じていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	農業工学専攻博士前期課程では、農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力を確立し、地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学における専門知識と、研究および論文作成手法を修得するための科目を体系的に配当し、コミュニケーション能力を増強できるカリキュラムを編成しています。また、博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力を確立し、農業工学の専門的課題を自ら解決できる能力を獲得させるため、問題抽出能力、分析能力、企画能力を養うことを目的とし、コミュニケーション能力や問題解決能力を増強できるカリキュラムを編成しています。	専攻全体で行う行事では、学生, 教員間の研究交流を重視し、円滑な情報交換により学習効果を高め、活性化する活動に重点を置いています。	農業工学特別演習や農業工学特別研究については、主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもとに開催される中間発表や最終発表に基づいて、大学院担当教員全員で成績評価とともに単位認定を行い、学位授与の可否を決定しています。特に博士論文の審査報告概要並びに審査報告会実施記録においては、主査が作成した後、全ての大学院担当教員が確認し、提出しています。	博士前期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し修士論文を提出するとともに、農業工学に関する専門知識と研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における技術開発や問題解決に役立てる能力を備えた学生に修士の学位を授与しています。また、博士後期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し博士論文を提出するとともに、農業工学に関する高度な専門知識と優れた研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における具体的な問題解決に資する高度な能力を備えた学生に博士の学位を授与しています。	大学院生による授業評価をセメスターごとに実施しており、その結果を受けて優先的に対応すべき課題の抽出と分析を行い、改善計画を提出しています。併せて、作成した改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次回の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続しています。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 博士前期課程では農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者として、また博士後期課程では、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力の確立を目指している点。	【長所】 研究生活での学生の孤立が避けられる点。	【長所】 学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定している点。	【長所】 農業土木および農業機械，環境情報分野の学問を基軸として、国内のみならず海外の現場での技術開発・問題解決と学術的な研究を両立できる高度な能力を持った人材の輩出を目指している点。	【長所】 受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できている点。
	【特色】 地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学の４つの専修で構成し、専修ごとに高度な専門教育を行っている点。	【特色】 専攻の人数を活かして、国籍を問わず専攻全体での一体感が育まれる点。	【特色】 専攻内にある４つの専修が合同で学位審査を行っていることから、幅広い見地で評価が行われている点。	【特色】 主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもと、中間発表や最終発表を実施し、学習成果とともに研究成果を評価している点。	【特色】 1 専修あたりでの学生数が少ないことから、専修全体でのイベントにおいて学生, 教員間での交流を密にすることを心掛けている点。

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 受講生の少ない科目については、回答した院生を特定できてしまうため、回収率が低く、また、回答内容の信憑性が低くなっている可能性がある点。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 大学院授業評価の方法。
根拠資料名	シラバス（資料 1-1） 専攻会議議事録（資料 1-2）	専攻会議議事録（資料 1-3） 中間発表会レジメ（資料 1-4） 修論発表会レジメ（資料 1-5） クッキングセミナー実施報告（資料 1-6）	専攻会議議事録（資料 1-7） 発表会評価シート（資料 1-8） 審査報告会実施記録（資料 1-9）	修士論文（資料 1-10）	授業評価アンケート（資料 1-11）

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	農業工学専攻では、以下の学生受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制（推薦入試、一般入試等）を適切に整備し、公平に入学者選抜を実施しています。	満足度評価をセメスターごとに実施しており、その結果に基づいて学生受け入れ時の事前相談や説明会内容の適切性について評価を行っています。 さらにその結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っています。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 様々な入学者選抜制度があり、多様な人材の受入を目指している点。	【長所】 なし
	【特色】 JICA が斡旋している PEACE や ABE イニシアチブなどのプログラム参加留学生の受入れの他、国際協力経験者入試を行うなど海外で活躍できる人材の育成に努めている点。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 工学分野では求人が多く、日本人学生の進学率が低い点。	【問題点】 なし
	【課題】 優秀な日本人学生の進学率を向上させること。	【課題】 優秀な日本人学生の確保につながる受入れ方法の確立。
根拠資料名	専攻の説明会の実施 HP（資料 2-1） 募集要項（資料 2-2） 入試 HP（資料 2-3）	教育評価の結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書（資料 2-4）

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	教員組織の編制に関する方針として、農業工学専攻では、以下を明示しています。 農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業工学分野における保有する博士学位や高度な専門能力及び論文作成指導能力に加え、国際化に対応しつつ、人類が直面する農業農村開発と自然環境の保全との狭間で生じる地球規模の諸問題の複雑化に合わせて、多様な教育・研究を展開する教育体制を構築し、建学の精神「人物を畑に還す」のもと、国内だけでなく、世界各国、地域で活躍する優れた高度な人材を育てることを目的として、農業工学分野における高度な専門的能力と学識を備えた研究者及び技術者を養成する研究室体制を構築し、その維持・向上に努める。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「３つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業工学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しています。	資格審査基準等に則り、適切に教員の募集、採用、昇任等を行っています。	前年度まで実施していた「農業工学専攻におけるグローバル学術リーダーの育成プログラムの推進プロジェクト」を基に、教員と大学院生が参加できるイベントとして、国籍を超えた文化的な理解を深めるためのイベントを実施しています。 この取り組みは、農業工学専攻の大学院教員の資質向上（FD）を目指しています。	東京農業大学自己教育評価において、定期的に点検･評価に取り組んでいます。

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 教員の参加率が高い点。	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 文化的な背景を理解することにより研究交流が活性化する点。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 予算の確保。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 継続的かつ魅力的なテーマの設定。	【課題】 なし
根拠資料名	専攻内指導教授会議事録（資料 3-1）	専攻内指導教授会議事録（資料 3-1） 大学院学生便覧（資料 3-2）	専攻内指導教授会議事録（資料 3-1）	クッキングセミナー実施報告（資料 3-3） 専攻会議議事録（資料 3-4）	教育評価の結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書（資料 3-5）

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　造園学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	29 年度入学の博士前期課程 1 年生から新カリキュラムを実施し、選択必修科目の履修変更や必修科目「造園学総論」などを設定した。専攻内における専門性を高めるとともに，造園学の幅広さと社会的意味など体系的理解の強化，及び 9 月入学等の国際化に対応できるようにした。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、検討会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。特に本年は，2019 年度に続き「教育改革推進プロジェクト」予算による外国人教員による講義や演習を実施した（Hofstra 大学 Patricia Welch 教授，Osnabruck 大学 Dirk Junker 教授）また，海外協定校の中国北京林業大学から 2 人の大学院生と教員を招き，本専攻や学部の演習の授業に本専攻生と共に受講した。	専攻内の教員が成績評価を行い，学位授与に際しては研究発表内容をもとに専攻内会議を実施して、十分な議論のもとに実施した。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、検討会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。また専攻内の教員が院生の学習成果を個別に把握しており，研究について学会等での発表、投稿を積極的に行うように指導している。	授業の実施内容等について､少人数であるため大学院生との話し合いから進めることができた。研究環境、特に実験・演習スペースについては大学院生が今まで以上に満足度が向上するような更なる取り組みが必要かと思われる。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 造園学の社会的役割の再確認や専門性の深化を実施することができた。	【長所】 国際感覚を養うことができた。 本学造園学専攻の大学院生の大きな刺激になり，交流も深めることができた。	【長所】 教員によって評価の視点が多様であり，評価が一面的とならない。	【長所】 学位授与方針により，学習成果の評価を適切に運用した。	【長所】 定期的な点検を行うことにより，専攻全体の学習状況や研究実績の状況確認が可能となった。
	【特色】 造園学のもつ広範な分野の理解とそれに基づいた専門分野の特徴を理解することができた。	【特色】 院生自信の専門領域の確認や妥当性の検証ができた。	【特色】 多様な視点からの厳正な評価を行うことができた。	【特色】 明瞭かつ公正な評価を行うために常に確認をした。	【特色】 大学院生からの意見等も反映させ，適切性を可能な限り保てるよう努力した。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 平成 29 年度から始まった博士前期課程の新カリキュラムについて，専門性と総合性のバランスを図る検討が必要である。	【問題点】 持続的な実施ができるようにする。	【問題点】 異分野の研究の場合、特に学位授与に際しては、検証が難しい場合も考えられる。	【問題点】 特になし	【問題点】 研究環境、特に演習，実習スペースの確保の検討が必要である。

	【課題】 平成 29 年度から始まった博士前期課程の新カリキュラムについて，選択必修科目の必修化の検討も必要である。（大学院再編に伴う地域環境科学研究科のカリキュラム改正で検討した）	【課題】 年々進む国際化へ対応できるような意識改革と実施が必要である。	【課題】 発表会、検討会、意見交流会などを通じ、今まで以上に論文の検証を継続的に実施することが必要と考えられる。	【課題】 より安定した明瞭かつ公正な評価の実施を行う。	【課題】 ・新研究棟への移動に伴う実験・演習スペースについては、継続的な検討を行い、より良い研究環境の確保に努めたい。
根拠資料名	履修・取得単位科目 ◆大学院カリキュラム①、◆大学院学生便覧①、◆大学院シラバス、◆専攻３ポリシー①	◆発表会、検討会、意見交流会実施記録④、◆外国人教員による授業実施記録⑤、	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料⑦、◆発表会、検討会、意見交流会実施記録④	◆発表会、検討会、意見交流会実施記録④、◆学会等での発表、投稿実績⑦、◆専攻３ポリシー①	◆新研究棟の研究室

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑ している □ 一部している □ していない	☑ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する現状説明	キャンパス見学会時の入試説明や論文発表会への学部生の参加を促す一方，試験問題の開示を行い，公正に実施している。	I 期および II 期の 2 回にわたる入試時期に，その時の状況等について専攻内教員間で議論を行い，適切性について十分な議論と取り組みを行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 早い時期から大学院進学に関する情報をあたえることにより、より意欲の高い学生を確保することが可能となる。	【長所】 入試の実施に伴い必然的に検討する機会がある。
	【特色】 学部生が早い時期から大学院の専門教育の実態や研究をめざす人材を発掘することができる。	【特色】 学力のみならず面接を実施することで、応募者の学生の研究に対する意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 本学学内学部生の進学率も低い。これは高い学部生の就職率によるものである。	【問題点】 近年、留学生の応募者や受験相談者も少なくなく、研究能力が十分であるかなどの検証が難しいケースが見受けられた。
	【課題】 社会とのバランスをみながら，長期履修制度などを利用した社会人入学制度の案内なども積極的に行う。また学部生に対しては，大学院教育や研究の魅力を，講義などを通して積極的に行う。	【課題】 受験希望者(特に学外からの留学生受験者)に対しては、可能な限り複数回、対面式で早い時期から相談などを行い、研究能力や修学の意思確認などをより密に実施することが重要かと思われる。
根拠資料名	◆入学数①，◆大学院入試募集要項、HP 等①、◆入試過去問題 HP①、◆専攻３ポリシー①	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	専門分野ごとに，適切な人材が配置されるように定期的な会議を開き議論している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	学部再編(平成 30 年度)に伴う教員数の削減により，新規採用が厳しくなっている。大学院指導の有資格者の確保が緊急課題である。	地域環境科学研究科の設置に伴い 4～6 月に定期的に大学院指導教授会議を開き，適切な教員配置について議論した。	国際的視野によって，本学造園学専攻の教育・研究方針をどうあるべきか，常に議論し，その方針に基づいた人員配置ができるように努めている。	地域環境科学研究科の設置に伴い 4～6 月に定期的に大学院指導教授会議を開き，適切な教員配置について議論した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 学部における教員編制の充実化。	【長所】 教員の採用、昇格に伴う教育研究活動の展開が可能となる。	【長所】 学部において，外国人教員の採用も図るように努め，今後の大学院教育の在り方を探った。	【長所】 自己点検結果を，学科内指導教授会議で確認した。
	【特色】 専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制を構築可能である。	【特色】 新たな教員確保に伴う大学院教育の充実を図る。	【特色】 教員の採用、昇格に伴う専攻内の教育研究活動の活性化。	【特色】 国際化を図る。	【特色】 従来行われていた修士論文に代わる修士制作の廃止（大学院本委員会で決定)。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 今後専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 今後，専攻内の十分な教員数の確保がさらに困難な場合が想定される。	【問題点】 指導体制が整備されつつあるが、今後専攻内の教員数を十分に確保することが難しい場合が想定される。特に造園学を修めた専門家の減少が危惧されている。	【問題点】 国内の造園の特色をどのように国際レベルで発信できるようにするのか，多くの議論が必要である。	【問題点】 学内での活動やプロジェクトの成果等の評価判定が難しい。
	【課題】 大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要性がある。特に学部，学科体制との調整が必要である。	【課題】 大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要性と共に人材導入も含め，新たな人事体制を構築する必要性が考えられる。	【課題】 大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図り，新たな人事体制を構築する必要性が考えられる。	【課題】 今後の学部人事の編制に際しても大学院組織と連携した人事体制を構築できるような検討が必要である。	【課題】 従来行われていた修士論文に代わる修士制作の廃止に伴う，改善計画をたてる。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆専攻の教員編成方針③a	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの③b	◆指導教授会議での検討を示す議事録・資料②、◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの③b	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの③b	◆指導教授会議での検討を示す議事録・資料②、◆外国人教員による授業実施記録⑤、◆造園調査法詳論及び演習実施記録⑥

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名	農学研究科
学部長・研究科委員長名	上原　万里子
学科名・専攻名	国際農業開発学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	教育課程の編成方針にしたがい、自然科学と社会科学、必修科目と選択科目、座学と実験・演習、フィールド調査などを適切に開設し、体系的に編成している。	各年度に 2 回、専攻合同の院生発表会を開催し、すべての院生が研究計画発表・中間発表・最終発表をおこなっている。	成績評価および単位認定は各科目の評価責任者が指導実施記録にもとづいて適切におこなっている。学位授与については、院生発表会における最終発表のあとで学位論文を審査する選考会議において判定している。	院生発表会におけるプレゼンテーションと学位論文によって、院生の学習成果を適切に把握し、相応の評価を実施している。	研究科のとりくみとして前･後学期に院生による授業評価をおこない、その結果に応じて専攻としての改善計画を研究科に提出している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 自然科学系科目と社会科学系科目を必修科目とすることにより、分野横断的な教育が実現されている。	【長所】 専門分野のことなる教員や院生を前にプレゼンをおこなうことにより、みずからの研究内容や研究姿勢を客観的に把握することができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 ほかの大学院・専攻にはないマルチディシプリナリーなカリキュラムとなっている。	【特色】 専門分野のことなる教員・院生が一堂に会し、共通のテーマでディスカッションをくりひろげている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、実験・演習への対応が不十分となっている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、院生発表会に参加できる時間がかぎられたものとなっている。	【問題点】 各学期の授業終了から成績評価提出までの期間がみじかく、提出されたレポートなどを評価する時間が十分にとれない。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、院生と個別に対応する時間が相対的にみじかくなっている。	【問題点】 本専攻は全院生のほぼ半数を留学生がしめているが、研究科の作成する授業評価では、留学生にはわかりにくい項目やミスマッチな設問が散見される。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 ◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、	院生発表会実施記録	◆院生発表会実施記録、 ◆論文審査選考会議議事録	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 院生発表会実施記録	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	年 2 回の入試でそれぞれ入試説明会を実施するとともに、ウェブなどを利用して過去の入試問題を公開するなど、学内外からの受験者に配慮した説明をおこなっている。入試においては各専門分野からの出題と複数担当（自然科学系および社会科学系）による英語問題の出題など、分野横断的な教育方針にそって筆記試験を実施している。口述試験は専攻内の全指導教員が担当し、各専門分野の観点から試問をおこなっている。また、留学生の増加に対応して筆記試験・口述試験とも日本語・英語のバイリンガルで実施している。	年 2 回の院生発表会でのプレゼンテーションで、院生の研究に対するとりくみを評価している。また個別の問題にかんしては必要に応じて専攻会議でとりあげ、専攻教員間で情報共有をはかるとともに、改善策を随時検討している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 2 期入試の時期が後学期の学位論文審査の時期に近接しており、入試業務にあたる一部の教員に過重な負担を強いている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、専攻会議の開催に支障をきたしている。
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP	院生発表会実施記録、 ◆専攻会議議事録

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑ している □ 一部している □ していない	☑ している □ 一部している □ していない	☑ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない	□ つなげている ☑ 一部つなげている □ つなげていない	□ 行っている ☑ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各専門分野（研究室）に指導教授を配置し、院生の研究指導にあたっている。授業においては指導教授にくわえて授業担当教員を配置し、教育・研究活動を展開するための適切な教員組織を編成している。	専攻のすべての指導教員と授業担当教員が出席する専攻会議において、人事計画が審議・決定されている。教員の募集、採用、昇任等は大学の規定にそって適切に行われている。	教員の資質向上は基本的に個人の努力に帰するべきものであり、専攻としては各教員が研究や自己研鑽に十分な時間をさけるよう、組織的かつ多面的な配慮をおこなっている。	専攻のすべての指導教員と授業担当教員が出席する専攻会議において、教員組織の適切性について随時検討をおこなっている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、全体として大学院での教育・研究活動にさける時間が近年減少している。	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、研究や自己研鑽にさける時間が十分とれていないのが現状である。	【問題点】 専攻において教員組織の適切性について検討をおこなっても、トップダウンによる組織改編や補職人事がしばしばあるため、実際の運営に反映することは困難である。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻３方針_161209	◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆専攻会議議事録 ◆学科（専攻）教員配置表―年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆専攻会議議事録	◆専攻会議議事録

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　農業経済学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	農業経済学専攻では，具体的なカリキュラムポリシーとして，以下のように定めて教育課程を編成している。 （１）「農業経済学、農政学、食料経済学を基幹科目として配当し、修士論文作成のために、問題意識の醸成や研究方法・調査技術の修得が行えるよう特論および演習を必修科目として配当する」。これに対して，農業経済学、農政学、食料経済学の各特論と特論演習を配置し，大学院生はそれぞれの専門分野をセットで履修するよう指導している。 （２）「指導教授または指導准教授や論文指導教員以外の多様な研究方法や研究視点を学べるよう選択科目を配当する」。これに対し，上記の特論・特論演習科目のうち，専門以外の分野の科目を，研究計画や関心に応じて履修できるようにしている。 （３）「プレゼンテーション能力や議論の能力を高めるため、必修科目として総合演習を配当する」。これに対し，農業経済学総合演習（前期課程）および農業経済学研究総合演習（後期課程）を開設している。 （４）制度的な枠組みを学ぶため、農業法に関する科目を配当する。これに対し農業法特論Ⅰ・Ⅱを開設している。	入学時および進学時の４月にガイダンスを行い，大学院生としての心構え，必要な手続きなどを説明している。 大学院生の論文を指導教員以外の教員の査読を経て掲載する学術雑誌『農経研究報告』を発行している。平成 31 年度の詳細については「包括的点検・評価報告書」を参照。 大学院生の研究室を 13 号館と 18 号館に各１室設置していた。新研究棟においても 2 室設置している。それぞれ学生どうしで交流が図れるようにしている。	成績評価について学生が説明を求める場合は科目担当教員が面談等を行う。 総合演習の評価及び学位認定については，専攻全教員が参加する専攻委員会で判定している。総合演習の評価については 1 月 27 日の，前期課程の学位認定については 2 月 17 日，後期課程の専攻内における審査報告会は 1 月 16 日、1 月 27 日、1 月 30 日，その実施記録の承認については 2 月 3 日、17 日の各専攻委員会で行った。	農業経済学専攻では，前期課程では，食料、農業、環境の農業経済学的側面にかかわる知識，農業経済学および関連分野において、研究者、教育者あるいは専門家として活動しうる能力，図表を効果的に利用しながら文章で適格に表現して、情報発信する能力等をディプロマポリシーに掲げている。後期課程では，農業経済学の専門領域における高い専門性を保証する国際的なレベルでの高度な知識，体系的に情報を整理し、論理的思考に基づく研究能力，食料問題・農業問題・環境問題等の解決に向け、リーダーシップ能力等を掲げている。これにもとづき，前期課程については，修士論文の中間報告会を３回，最終報告会を１回開催している。後期課程については，博士論文の中間報告会を３回，最終公開報告会を１回開催している。このなかで，指導教員以外の教員から，多角的にアドバイスを得ながら，必要な知識・能力・態度を身につけられるようにしている。さらに後期課程の最終学年においては，副査予定者が博士論文の研究指導者となり，上記の項目水準を満たせるよう指導体制を整えている。	学生に対するアンケートに基づき，点検・評価を行うとともに，改善計画を立てて，向上を図っている。

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 農業経済学に関連した幅広い分野を学ぶことができる。	【長所】 １科目あたりの受講生が少ないので，受講生に合わせてきめ細かな授業を行っている。	【長所】 総合演習の評価・学位認定については，合議に基づいており公平である。	【長所】 なし	【長所】 少人数で学生一人ひとりに応じた指導が可能となっており，比較的学生の満足度が高くなっている。
	【特色】 なし	【特色】 受講生に合わせて，英語または英語・日本語のバイリンガルでも授業を行っている。	【特色】 日本語のほか，英語での修士論文・博士論文の提出を認めている。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	カリキュラムポリシー シラバス	ガイダンスの配付資料 『農経研究報告』の各号	学生の成績 専攻委員会議事録	各報告会の資料 審査報告並びに審査報告会実施記録	教育評価の結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑ している □ 一部している □ していない	□ 行っている ☑ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する現状説明	農業経済学専攻博士前期課程では，具体的なアドミッションポリシーとして，経済学に関する基本的な学力，専門領域における知識や研究方法の基本的な学力，日本人は英語、外国人は日本語の基本的な語学力，食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し，前期課程の学力試験については，基礎的科目・専門科目として，経済学・農業経済学・農政学・食料経済学から２科目を選択，語学については英語又は日本語から選択できるようにし，外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は，英語又は日本語から選択可能としている。また，専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲を判断している。後期課程については，専門領域における知識や研究方法，第二言語として英語または日本語のより高度な運用能力，研究資料を得るためにコミュニケーション能力を有するとともに、それらを緻密に整理できる能力，食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって率先して問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し，学力試験については，専門科目として，農業経済学・農政学・食料経済学から１科目を選択，語学については英語又は日本語から選択できるようにし，外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は，英語又は日本語から選択可能としている。また，専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲のみならず，修士論文等の作成状況などを問うことで，受験生の能力を判断している。 学生募集については年３回説明会を開催し，アドミッション・ポリシーを用いながら，とくに外部からの進学希望者については丁寧に説明している。 個別の学力試験の採点結果は複数の教員が確認するとともに，専攻委員会で公正に選抜している。	専攻委員会で入試科目やアドミッションポリシーの適切性について点検・評価を行い，数年に１回の割で改善を図っている。ただし，平成 31 年度入試については従来通りとなった。 現在，学生の在籍者数は定員を満たしていないが，反面きめ細かい指導が可能となっている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 留学生や社会人の受験希望者が比較的多い。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 受験生の数が低迷している。	【問題点】 なし
	【課題】 内部進学者を増やすために，学部のゼミや研究室を通じて，大学院進学の具体的なイメージを持ってもらうことが必要である。	【課題】 新専攻の分離に伴い，一部見直しが必要になるかもしれない。
根拠資料名	試験問題及び解答用紙 専攻委員会議事録	専攻委員会議事録

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	教員組織の編制として，下記のような方針を定めている。 本専攻は以下の要件を満たす教員で組織する。編制にあたっては、農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業・食料・環境の諸問題に対して経済学をはじめとした社会科学の手法を用いて多様な研究・教育を展開しうる研究室体制と社会科学の特性を踏まえた教育体制を構築し、その維持・向上に努める。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「３つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業経済学や関連社会科学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	農業経済学専攻は，学科再編に伴い，食料環境経済学科と国際食農科学科に所属する教員で構成している。食料環境経済学科の６研究室および国際食農科学科の２研究室を編成し，各研究室原則として３名の教員で構成されている。平成 31 年度は，指導教授 13 名，授業担当教員 6 名となっており，男性 16 名，女性 3 名である。現在欠員になっている研究室があるため，令和 2 年度に向けて，早めに食料環境経済学科と連携して公募を開始し，教員の授業などの負担の軽減を図るとともに，指導体制の充実を図っている。	新規教員の募集・採用については，食料環境経済学科と一体的に行っている。募集はすべて公募によって行い，本学および科学技術振興機構のホームページ等で公募情報を公表している。採用・承認については，大学の基準に従い，専攻委員会で審議を経て公平かつ適切に行っている。	各研究室の中で指導教授などが新任教員や若手教員にアドバイスを行い，資質向上を図っている。また，令和元年 7 月に全学的に行っている FD フォーラム，公的資金の利用管理に関する講習会，ハラスメント講習会などに各教員は参加し，資質向上を図っている。	教員の研究室体制については，時代の変化や研究･教育上の効果を鑑みて，数年に一度，関係教員全員で検討を行い，研究室の再編を行ってきた。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし

年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
根拠資料名	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 新専攻の分離に伴う組織体制の検討。
	専攻委員会議事録	専攻委員会議事録	専攻委員会議事録 学科会議議事録	各講習会等の参加名簿	専攻委員会議事録 学科会議議事録

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　　農学研究科
学部長・研究科委員長名　　上原　万里子
学科名・専攻名　　国際バイオビジネス学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	国内外の食・農・環境ビジネスに関する専門科目を配置している。 講義内容のシラバスへの反映、15 回開講の確実な実施している。 休講時の補講を適切に実施している。 最先端研究の知識などを得るため、不定期に外部講師による講義を実施している。	調査・研究能力の向上を図るため、学期ごとに調査研究成果報告会を実施ししている。 柱科目の演習を必修科目として設置し、きめ細やかに指導している。 柱科目の演習では論文指導のみならず対外発表の指導も行っている。	成績評価と単位認定は、農学研究科の評価基準に従って行っている。 学位授与は、原則として全教員が参加する学位論文報告会を開催し、絶対評価に基づく審査および完成論文審査により行っている。 中間発表会（プレゼンテーション）を実施している。	専攻主任、主事がシラバスチェックを行い DP の整合性をチェックしている。 各学期において、指導教員が学生の取得単位数と成績内容を把握している。 調査研究成果報告会を通じて、個々の学生の総合的な研究能力を把握している。 指導教授が就職相談を実施している。	大学院改組に向け、カリキュラムと教員配置について点検し、新研究科のもとで本専攻の教育体系を継承・向上・改善するための検討を始めている。年度内にカリキュラム改訂を含む検討事項について結論を出す。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 食・農・環境ビジネスの理解やその調査・研究に必要な知識や能力が身につく。	【長所】 調査・研究能力の向上に加え、プレゼンテーション能力が身につく。	【長所】 成績評価、単位認定及び学位授与の客観性が保たれている。	【長所】 調査研究成果報告会での学生評価は、総合的な研究能力を把握する上で重要である。	【長所】 新研究科への移行を契機に、教育課程の改革を総合的に進めることができる。
	【特色】 ゼミ形式による少人数教育で、個々の大学院生に応じたきめ細やかな教育を行っている。	【特色】 日本語のみならず英語での報告・質疑応答もあり、国際性の向上に寄与している。	【特色】 全員の論文、報告内容、発表について点数化し、その結果をもとに成果を評価している。	【特色】 特になし。	【特色】 教員配置とカリキュラム、教育計画などを長期的視野のもと点検・評価し検討できる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 授業等の関係で、参加できない教員もいる。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 全学的なポスター発表会への積極参加について検討する。	【課題】 特になし。	【課題】 学会活動を活性化し、国内・国外の会議における研究発表を推奨するよう指導する。	【課題】 特になし。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、専攻会議資料、◆専攻３ポリシー	中間発表会資料	中間報告の評価、中間発表会資料（個人が特定できるため部外秘）◆成績評価基準、◆学位論文審査基準	◆専攻３ポリシー	専攻会議資料

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	学生募集や入試にかかわる情報は Web ページにおいて公開しており、全受験者に公正に提供している。また、願書提出方法や奨学金情報にかかわる詳しい説明、さらには個々の志願者の質問への回答などのため、願書提出前に専攻単位の入試説明会を定期的に開催し、学生募集・入学者選抜における公平性を担保するための取り組みを実施している。 入試過去問題の公表、入試問題作成の内規の整備、口頭試験内容の標準化を専攻独自にルール化し、公正な入学者選抜に努めている。 海外現地入試など多様な入試を検討している。	ABE イニシアティブ、特別留学生など留学生の受け入れを積極的に行っている。 学生の適性について、個々の学生の評価・適性を専攻内で共有し、定期開催する報告会にて相互に点検・評価し、問題点の把握と改善を検討している。 一般入試のみならず、国際協力経験者入試、社会人入試、秋入学など多様な入試制度の受け入れを行っている。 留学生を中心に、学外の奨学金獲得に向け、応募書類作成の支援や推薦書作成を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 指導教授との進路相談などを通じて、研究計画策定など入学希望者の事前準備を重視しいている。	【長所】 個々の学生と緊密に連携し学生受け入れの改善に努めている。
	【特色】 博士前期課程入試においては英語の試験を TOEIC に置き換えるなどし、公正な入試選抜を行っている。	【特色】 学生指導では、指導教員と指導補助教員からなる複数教員による教育指導態勢を採用している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 日本人学生の大学院進学が低いことから大学院志願者数が減少傾向にある。
	【課題】 推薦入試導入の検討が必要である。	【課題】 日本人学生の進学を促すため、学部授業において大学院進学をアピールすることが必要。 学外奨学金を積極的に獲得するよう指導する。
根拠資料名	専攻会議資料、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP、◆専攻３ポリシー	専攻会議資料、中間報告会資料、奨学金推薦資料（個人情報のため部外秘）

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　つなげている ☑　一部つなげている □　つなげていない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	指導教授による専攻委員会を不定期に開催し、指導教授推薦など教員組織編制の方針を確認し必要に応じて改善している。 学科や学部で教員募集を行った場合、常に大学院担当について意識しながら専攻人事の方針を決定している。	学部改組に伴い教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻会議にてはかり、指導教授により構成される専攻委員会にて適切に審議している。	研究室単位で合同ゼミを行うなど、若手教員の FD 向上がみられる。 専攻独自に FD 研修会などは開催していないが、積極的に学内の FD 講習会に参加している。 授業評価アンケートに取り組むよう、学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに点検・評価することを奨励している。 若手教員指導体制が確立している研究室がある。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針に基づき、英語で指導できる教員数が増えた。	【長所】 専任教員が減少しているが、継続して多彩な科目を提供している。	【長所】 研究室ごとに指導教授が存在し、研究室ごとに募集・採用・昇任を検討できる。	【長所】 特になし。	【長所】 特になし。
	【特色】 英語で研究指導するなど、国際性が向上した。	【特色】 英語で指導可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 すべての研究室が英語で指導しておらず、留学生の研究室選択に偏りがある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 学位未取得の教員がいるため、学位取得を促す必要がある。	【課題】 特になし。	【課題】 若手教員の研究力向上のため、海外留学を計画する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表、学生便覧、HP 等	専攻会議資料 （合同ゼミ実施実績については、1 研究室が毎週 1 回実施した、FD 研修会参加者はいなかった）	専攻会議資料

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　環境共生学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	生物学，資源学および地域学を基礎とし総合的・複合的科目を通して，学位授与のための教育課程を編成し，各指導教授が研究手法を通じて研究発表能力および学位論文執筆等を体得できるように教育している．	定期的に行われる専攻会議において，各指導教授から，院生の研究進捗状況の報告を実施してもらい共通認識をするとともに，問題がある場合，教員相互で意見交換を行い、対策を立てている．	指導教授による院生への研究・教育指導を密に実施し，在籍３年目には，学位授与ができる体制を整えている．2019 年度は，３年生３名院生のなかで２名の研究が停滞し，学位申請ができないケースがあった．	自然・社会・人文科学を基礎とした総合科学分野の高いレベルでの研究能力を備え，環境共生型社会の実現のために社会貢献できるような研究に対して学位授与ができるよう実施している．	専攻会議および各専攻教員が定期的に点検・評価をし，改善・向上に務めている．
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 多様な専門を有する社会人院生が在籍するため自然・社会・人文科学が融合した総合科学分野からの視点で研究ができる．	【長所】 なし	【長所】 社会人院生に対しては，授業以外の場面でも，指導教授が指導体制を強化し，研究発表および学位論文作成の指導をし，成果を上げた．	【長所】 年２回のスクーリング授業を通して，院生相互の研究，教員の講演などにより学位授与方針に則った体制を整えている．	【長所】 なし
	【特色】 環境共生に関する総合的・複合的な視野をもち高度な研究能力を有する人材を養成できる．	【特色】 なし	【特色】 年２回スクーリングによる研究発表会を実施しているため，専攻全体の教員が常に院生の研究情報を把握し，多角的に助言できる．	【特色】 本専攻の教員は，自然・社会・人文科学の多方面から優れた教員が集まっており，院生に対して様々な角度から研究指導ができる．	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 社会人院生が多く在籍するため，指導教授との相談は密に行われているが，院生同士の研究交流の機会を多くする．	【問題点】 なし	【問題点】 2019 年度は，３年生院生のなかで病気療養者が出てしまい，学位申請ができないケースがあり，留年となった．	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 指導教授および院生全員による研究発表スクーリング等の機会を増やし，研究交流を密にする．	【課題】 現状の継続	【課題】 2019 年度に留年した院生については，次年度学位取得に向け，指導教授を中心に専攻全体でバックアップしている．	【課題】 現状の継続	【課題】 現状の継続
根拠資料名	専攻会議議事録，授業実施評価報告書,スクーリング研究発表会抄録，ガイダンス資料,大学院海外研究発表支援プログラム、◆専攻 3P	専攻会議議事録，授業実施評価報告書	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，大学院海外研究発表支援プログラム	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，学位審査報告・実施記録、◆専攻３ポリシー	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，ガイダンス資料 大学院海外研究発表支援プログラム

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学全体で発信している募集情報だけでなく，専攻独自特色あるホームページから，とくに社会で活躍している経験と知恵と研究力を学位取得につなげる指導体制を整えていることを PR し，社会人特別選抜という入試制度を活用して，働きながら 3 年間で学位取得できることを実施してきた．さらに，仕事の関係で 3 年間では取得ができない院生には，入学当初から長期履修制度により対応できるように体制を整えており，順調に実施している．また，専攻の個々の教員も積極的に学生募集を行っている．その結果，入学生は定員数を確保している．	定期的に実施している専攻会議において，常に院生確保について教員相互で情報交換を行い，入学希望者に対して，事前に，研究体制として専攻内での研究指導教員の紹介と研究の方向性を指導した上で，入学試験が受験できるようなシステムを構築している．また，指導教授の他に，補助的に専門性をもつ他専攻の教員の指導も協力する体制を整備し，適切に学生が受け入れている．その結果，2019 年度の院生数は定員を確保している．
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 とくに，社会人選抜試験入試制度を主体として，働きながら 3 年間で学位取得できることを，専攻独自のホームページに明記し，指導体制を明確化し，院生獲得に努力している．	【長所】 定期的に行われる専攻会議において，毎回，院生確保について教員相互で広く情報交換をしている．入学希望院生には，入試事前に，研究指導を行い研究の方向性を明示し，入試合格後，スムーズな研究体制，学位取得ができるように指導体制を確立化している．
	【特色】 専攻独自のホームページからも，とくに社会人選抜入試での学位所得のシステムがあることを明記していること．	【特色】 入学前，事前に綿密な相談・研究計画の指導をしているため，スムーズに大学院在籍中の研究活動が実施できる．2020 年度は，入学予定者が 2 名おり全体で 15 名の院生が在籍し，本専攻において学位所得を希望するニーズが高い．
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 2021 年度以降，本専攻は募集停止となる．そのため，学生の受け入れはなくなる．現在在籍する院生の研究充実，指導が必要である．
	【課題】 現状の継続と院生確保のため，専攻教員の募集活動充実が必要である．	【課題】 現在在籍する全院生の 3 年間または 4 年間（長期履修生）での学位取得に向けた学位論文指導のさらなる充実が必要である．
根拠資料名	専攻会議議事録，大学院入試募集要項，大学ホームページ，専攻独自のホームページ，入試問題作成，合格基準内規，口頭試験実施専攻内規 ◆専攻３ポリシー	専攻会議議事録，授業評価アンケートおよび改善計画書，入試合否判定会議記録

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☑ 一部つなげている ☐ つなげていない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する現状説明	本専攻は，自然科学・社会科学・人文科学と広い研究分野の院生を指導する体制を整備するため多方面の教員を配置している．しかし，退職者等の補充をため，現在の生物・資源・地域学の各分野の教員確保に苦慮している． また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	本専攻における自然科学・社会科学・人文科学のバランス良い指導体制を確保するため，教員の研究分野の見直しを行い，分野配置の再編成をおこなった．	2019 年度は，専攻内教員で指導教授の資格を持っていない教員について，昇格の要請・依頼を検討し，業績の積み上げ等努力を促した．	専攻主任から，指導補助教員・授業担当教員には，常に研究業績をつくることを助言し，指導教授・指導補助教員を確保することに努力している．専攻内において，教員および院生に向けて年 2 回研究講演会を実施し，教員の研究充実をはかっている．	定期的な専攻会議において，専攻内組織について検討している．今後の退職教員に対する研究指導体制の見直し等も行った．とくに，2019 年度退職する指導教員がおり，その教員が指導する院生の留年に伴い，指導教員の変更を実施し，2020 年度学位取得がスムーズにできるよう配慮した．
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 院生の研究内容について，多方面から他の指導教授からのアドバイスが可能である．	【長所】 ・ なし	【長所】 なし	【長所】 自然・社会・人文科学の広い分野での指導教員の受け入れが可能であること．	【長所】 なし
	【特色】 環境共生学の分野において，広く自然.社会・人文と多方面で指導できる．	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 地域学分野の教員が 1 名で不足しており，学位論文審査のために補充が必要である．	【問題点】 なし	【問題点】 授業担当の若手の教員が少ない傾向にあり，今後の指導体制で人員不足に苦慮する．	【問題点】 様々な環境共生学の研究分野に対応できる教員確保が困難な状況である．	【問題点】 なし
	【課題】 学内および学外からの環境共生学に関する研究指導できる教員を確保し，バランスの良い指導体制を確保する．	【課題】 なし	【課題】 現専攻内教員の指導教授昇格を促進し，今後の指導体制を確保する．	【課題】 専攻内教員において指導充実体制を作っていく．	【課題】 なし
根拠資料名	専攻会議議事録，大学院教員名簿，◆専攻の教員編成方針	専攻会議議事録，専攻主任から専攻教員への人事体制依頼文書，教員人事申請関係書類，教務職員資格審査基準関連書類，大学院教員名簿	専攻会議議事録，専攻主任から専攻教員への人事体制依頼文書，教員人事申請関係書類，教務職員資格審査基準関連書類，大学院教員名簿	専攻会議議事録，研究講演会抄録	専攻会議議事録，大学院研究科委員会への指導体制変更申請書類

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員　上原　万里子
学科名・専攻名　食品安全健康学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	昨年度平成 30 年度に開設した当専攻の現カリキュラムは文部科学省に届け出たものであり、カリキュラムポリシーに則って、食の安全と健康機能に関する問題解決力を身につけることのできる編成になっている。今年度でカリキュラムを一通り行った。	英語論文購読という科目を設け、学生自ら英語論文を読み、理解し、教員、学生、院生の前で発表させている。また、食品関連分野の専門家を招き、最先端の情報、食品関連に興味を持つ情報を積極的に提供している。アリーナでポスター発表を行った。修士論文発表会を行い、発表を行うための準備方法、まとめる力、プレゼンテーション力を身に着けさせた。	単位制度および学位授与は、１年次に学生全員にガイダンスを行い周知させている。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。	各科目において、進行過程で出席状況と理解度を把握し、必要に応じて適切な指導を行っている。また，科目の終了時には，レポートやプレゼンテーション等によって学習成果の達成度を把握し，適切な評価を行っている。	学期末に学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布し、次年度以降の授業に役立てるようにしている。さらに評価の低い項目については改善措置を講じている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 食品関連分野の研究に必要であり、学部で学んだ以上に最先端の情報を取得、理解できる、また、自分の出した成果を他人に分かりやすく発表できるためのスキル、さらに、現在、世界中で問題となっている研究倫理についても学べるカリキュラムになっている。	【特色】 令和元年 11 月に行った、ポスター発表は全学的なものであり、専門が異なる教員、院生にも評価していただき、さらに彼らへの説明などを通し、プレゼンテーション力をつけた。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 昨年度は、学生アンケートにおいて、８０％の満足度のない項目があったが、改善措置を講じすべての項目で８０％以上の満足度になった。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名					

2019（令和元）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学院課とともに、入試説明会、ホームページ、大学案内等にてアドミッション・ポリシーを公開している。専攻において、大学院課の指導のもと、入学者選抜会議を開催し、入学者選抜を行っている。	毎年入学者選抜会議の際、学生受入の適切性について評価、検討している。来年度の入学者選抜に向け、本年度中にこれまでの反省点を踏まえたところ、例年 II 期入試による受験生が多かったため、定員２０名のうち、６名を II 期入試定員とした（現行２名)。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 推薦入試と一般入試の両方を設けている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 推薦入試による入学者定員について、現状でよいのか検討した。
	【課題】 なし	【課題】 現状のまま、GPA2.7 以上、定員６名が妥当であると判断した。
根拠資料名		

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☑　つなげている ☐　一部つなげている ☐　つなげていない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	開設時、教員組織の編成方針を作成した。大学、農学研究科の教育編成方針を踏まえ、本学科の専門性である「食の安全」と「食の健康機能」に関する能力、教育に対する姿勢を明示している。	当専攻の指導教員は１０名（うち女性２名）、指導補助教員は３名（うち女性２名）となっている。教員が担当する授業数においては多すぎないよう、適切な配慮がなされている。10 年さらに 20 年後の専攻の状況を考慮し、各研究室の教員の年齢はバランスよく構成されている。	教員の職位ごとの募集、採用、昇任等は、学則に則って行っている。	大学で開催されるファカルティ･ディベロップメント研修会や各種ハラスメント講習会などに教員が積極的に参加しているほか、教員資質の向上や教員・教員組織の改善に有用な情報を常に入手し、専攻内会議等を通じて，教員間で共有している。	毎年度末に行われる自己点検・評価を全教員が各々行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名					

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　農学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	学部との教育連携方法の検討
実行サイクル	5　年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	大学院授業科目について，学部での関連授業科目との連続性を意識した授業内容の実施を検討するとともに，シラバスにおいてそのことを具体的に表現した記述を行う。
目標達成を測定する指標	毎年のシラバスの改定に際して順次学部と授業との連続性を意識した表記を心掛ける。
自己評価 （☑を記入）	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学部での授業については基本的に導入的なものが多く，未知の領域に対して興味を抱かせるためのものであることが多い。したがって，専門分野についての広く深い理解が不足する傾向がある。学部改組後の学部での講義内容の変更が多く、学部との関連性を深めるには至らなかった。次年度以降の課題とする。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 改組後は学部学生が専門分野に関する知識技術の積み上げを具体的にみられるようになり，学部段階から徐々にステップアップさせ，大学院進学に際しての障壁を低く感じられるようになる。 【特色】 学部との連携により，より多くの院生が 6 年一貫的教育を受けることが可能となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 内部の教員だけでは指導が困難な場合もあり、外部の専門家等の参加が容易に行えるような体制づくりが必要である。 【課題】 外部講師との調整に難航し、達成が出来ていない。
根拠資料名	

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	博士研究員制度の導入検討
実行サイクル	5 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	博士課程進学者を増加させるとともに，それに付随して課程修了者の中から順次博士研究員を確保する。また外部の適格者についても採用できるように検討する。
目標達成を測定する指標	専攻内のいずれかの研究室（できれば複数）に博士研究員が在籍する。
自己評価 （☑を記入）	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	好景気動向により博士後期課程進学者が減っており、定員枠を満たすことが出来ておらず、さらにその後の博士研究員はさらに難しくなっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特定の専門分野について最新の知見や技術を有している者が研究教育に関与することにより，大学院や学部における研究教育レベルの向上が図れる。また比較的中長期的な研究にも対応できる。
	【特色】 博士研究員が大学院や学部レベルにおいて高度な教育研究指導を行うことにより，自身のキャリアアップを図ることができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 博士前期課程から後期課程への進学者が従来より減ってきている。
	【課題】 年次変動があるにしても、博士後期課程への進学者を増やすための経済的サポートを含めた方策を考える必要がある。
根拠資料名	

３．その他に関する総合的事項

	①	②
目　標	連続して入学定員以上の入学者を確保する。	新たな制度の導入によって定員枠が 2 倍以上に増大した推薦入試について、入学者確保に果たす役割を検証する。
実行サイクル	3　年サイクル（平成 29 年～令和元年）	3　年サイクル（平成 29 年～令和元年）
実施スケジュール	平成 29 年度内に実施される入学試験から始めて，毎年入学定員以上の入学者を確保する。入学試験の種類には推薦，一般（I 期および II 期）があるが，個々の入試の枠にはとらわれず，全体を通して入学定員枠以上の入学者を獲得できたかどうかを検証する。	平成 29 年度実施試験から推薦入試の実施方法が変わり，これまでに比べてより多くの優秀かつ研究意欲の高い学生を早期に確保すべく，入学定員枠を大幅に増加させた。この入学定員枠をどれだけ維持できるかを検証する。
目標達成を測定する指標	個々の実施年度における入学者数が少なくとも 3 年間連続して入学定員以上となること。	本専攻の推薦入試志願者数が，推薦入試定員枠を 3 年間連続して満たすこと。
自己評価（☑を記入）	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	好景気状況により進学よりも就職を選択する学生が多く、また辞退者もあり定員枠を確保できなかった。一つの問題は、受験者の英語能力の低下がある。定員枠以上の受験者があって、非常に意欲があっても最低限の英語能力が無いと研究活動は難しい。受験前からの指導が必要であろう。	推薦入試は定員枠を広げても応募者は多く、合格者はすべて入学している。また、これまでの実績で入学者はすべて期間内に学位を取得している。農学専攻においては、学内特別推薦入試は入学者確保と専攻内の学生レベルの維持、向上に意義があり、今後も継続して実施する意義があると考えられる。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 定員枠を確保し多くの院生が在籍することで、専攻内の交流を通して異分野の研究を含めた理解が深まる。	【長所】 学部在学の早い段階から大学院に向けた専門レベルの指導を受け，その後の研究遂行に対して高い意欲を示す学生を早期に確保することにより，その後の大学院での研究テーマを継続的に実施することができる。
	【特色】 多くが本学学部からの進学であり、長期的なテーマにより研究を継続でき、幅広く当該テーマの研究を進められる。	【特色】 長期的な研究テーマをもつことにより，そこに派生してくる新たな問題を解決するため，幅広い研究テーマを生み出すことができる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 大学院進学志望者数は，その時々の経済的な状況に大きく左右されることがあり，昨今の好景気の中では，学部卒業時点で優良な就職先を確保できることも多く，敢えて進学というリスクをとる必要性が失われてしまうことがある。 ・定員枠の確保は極めて重要な課題ではあるが，そのことにこだわるあまり不適格者を入学させてしまう可能性も考えられる。入学者選抜は慎重に行われるべきである。	【問題点】 農学専攻の特徴でもあるが、当該研究室が個別の学会所属となるような植物、動物、微生物など対象も研究手法も異なる分野の共同体である。今後、これらの多様性を生かした相互に協力した指導体制を考えていく必要がある。
	【課題】 大学院に進学し，さらなる教育研究の指導を受けることによって，学部卒業レベルでは到達できないより魅力的な進路を得ることができる実例をしっかり示せるように，教育研究だけでなくキャリ	【課題】 令和 2 年度から始まる複数指導体制への対応を図る必要があり、農学専攻の特徴である多様な学問分野に所属する指導教員体制を有効活用するための検討が必要である。

	ア教育を行うことが必要であり，そのためには教員サイドだけでなくキャリア課等事務方からのさらなる協力も求められる。	
根拠資料名		

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　畜産学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	大学院進学率の向上を目指した推薦入試制度の導入および定着	大学院生と専攻教員の相互コミュニケーションの構築	総合的な議論能力の練成
実行サイクル	3　年サイクル（平成　29 年～　31 年）	3　年サイクル（平成　29 年～　31 年）	3　年サイクル（平成　29 年～　31 年）
実施スケジュール	平成 30 年 5 月　畜産学専攻　推薦入試説明会 平成 30 年 6 月　畜産学専攻　推薦入試実施 平成 31 年に関しては推薦入試を停止した	半年に 1 回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握することで、学生への教育の質的向上や改善が可能になる。 令和元年 7 月　大学院研究進捗発表会 令和 2 年 1 月　大学院研究進捗発表会	大学院生を国内外の学会、研究会、勉強会や現地調査等に同行させ、他研究者や大学院生との議論能力・コミュニケーション能力の向上を図る。 平成 31 年度　国内外の学会、研究会、勉強会や調査等参加 （日程は各教員および大学院生でそれぞれ検討）
目標達成を測定する指標	推薦入試制度を利用した畜産学専攻への大学院進学者数 （目標：大学院入学定員数の充足）	畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：25 名） 畜産学専攻以外の学生および教員参加数（目標：10 名）	学会、研究会、勉強会、現地調査等に参加した大学院生数 （目標：大学院生が 2 年に一回程度の頻度で参加）
自己評価 （☑を記入）	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	平成 31 年度入学に関しては推薦入試定員数を満たす進学予定者 6 名を確保した。しかし入試実施時期が早期化し、被推薦者の適正判断が困難となったため令和 2 年度入学に関しては推薦入試制度を停止し、本制度を定着させることができなかった。	令和元年 7 月の発表会において専攻前期課程 29 名全員、後期課程 3 名の院生、2 年 1 月の発表会では修了年次生を除く前期過程 14 名、後期課程 3 名のほか、全指導教授および学部学生が参加し、目標人数を達成した。	平成 31 年度の延べ学会参加者 31 名で、ほとんどの大学院生がこれら外部の催しに参加している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 早期に進路決定が可能	【長所】 所属研究室以外の多数の教員とのコミュニケーションにより、院生の研究面、精神面の現状を多くの教員が共有することができる。	【長所】 院生の自発性を養うことができる
	【特色】 指導教授の推薦により教科試験が免除され、自身の実験研究に集中できる	【特色】 専門外の参加者への表現力を向上させることができる	【特色】 指導教員との緊密なコミュニケーションを必要とする
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】・学部就職率が良好なため、進学を回避する学生が多い 決定時期が早すぎ、入学決定後に進路変更・入学辞退者が出た。	【問題点】 学部学生および専攻外の参加者が少ない	【問題点】 特になし
	【課題】 就職に関して、大学院進学の利点を明確にする	【課題】 研究室での学部学生への参加と専攻外部への呼びかけを徹底する・	【課題】 特になし
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆推薦入試説明会実施記録等、◆推薦入試志願者数等	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆研究進捗発表会参加者数等実施記録	◆学会、研究会、勉強会、現地調査等、参加実績詳細

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①	②
目　標	大学院生の研究レベル高位平準化	大学院生主体の研究論文・学会発表数の増加
実行サイクル	3 年サイクル（平成　29 年～　31 年）	3 年サイクル（平成　29 年～　31 年）
実施 スケジュール	半年に１回の頻度で、専攻全体での研究進捗発表会の機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および内容を議論することで、学生の研究レベルの向上や改善が可能になる。 令和元年７月　前期大学院研究進捗発表会 令和２年１月　後期大学院研究進捗発表会	大学院生が実施した研究を基盤とした成果による国内外の学会への参加を促し、研究論文の雑誌等への投稿数増加を図る。 平成 31 年度　国内外の学会発表および研究雑誌への論文投稿 （日程など各教員および大学院生でそれぞれ検討）
目標達成を測定する指標	畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：25 名） 畜産学専攻以外の学生および教員参加数（目標：10 名）	国内外の雑誌等への論文投稿数および学会発表数 （目標：大学院生が２年に一回程度の頻度で学会発表を実施）
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	７月と１月の発表会について専攻内の目標人数を達成した。	平成 31 年度の延べ学会参加者 31 名で目標を達成している
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学院生自身が定期的に自らの研究の進展状況を判断できる	【長所】 学会発表により大学院生のモチベーションが上がる
	【特色】 指導教員以外の教員からのコメントを得ることが出来、また同一研究科の他の院生の研究を知ることが出来る	【特色】 学外の研究を知る
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 個人により発表回数に差が生じる
	【課題】 サイクル終了後の研究発表の継続	【課題】 不参加の学生を減らす
根拠資料名	◆研究進捗発表会参加者数等実施記録	◆学会参加、論文投稿等、参加実績詳細

３．その他に関する総合的事項

	①	②
目　標	大学院生の就職意識向上	博士後期課程進学者の獲得
実行サイクル	3 年サイクル（平成　29 年～　31 年）	3 年サイクル（平成　29 年～　31 年）
実施 スケジュール	大学院博士前期課程２年進級前から就職活動情報を積極的に提供し、迅速に就職活動を開始できるように準備させる。 平成 31 年度　適宜に学内外の就職活動情報を提供	畜産学専攻博士後期課程に進学する大学院生を積極的に獲得し、将来の大学教員候補を育成する。特に、各研究室における活動の中で専攻教員が大学院生と密なコミュニケーションを取り、博士後期課程の情報などを積極的に提供する。 令和元年６月および 12 月　大学院進学説明会実施
目標達成を測定する指標	大学院生の就職率	博士後期課程進学者数
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和年２月現在卒業年次生前期課程 15 名のうち 13 名が就職内定を得ている。なお残り２名は当専攻後期過程への進学が決定している。	１期試験において後期課程に内部受験者各２名合格
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 指導教員が大学院生に対し直接就職活動を促す	【特色】 学部出身者が後期課程まで進学し農大の学位を得ることで将来の大学教員を確保できる
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 学部卒業生との就職先、就職率の差別化	【問題点】 進学者の分野が偏っている
	【課題】 大学院進学を生かすことのできる就職先の紹介	【課題】 ポスドクの就職先の確保
根拠資料名	◆令和２年３月卒業年次生の就職内定状況	◆大学院進学説明会実施記録、◆令和２年度博士後期課程入試実績等

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　バイオセラピー学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	社会の現場で知的リーダーとして活躍する人材の育成
実行サイクル	２　年サイクル（平成　２９年～　３１年）
実施 スケジュール	プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を磨くため 各研究室における論文紹介、研究発表の場でのプレゼンと聴講 毎月定期的に実施される大学院セミナーでの研究紹介と質疑応答 学科教員によるセミナー開催 年に１度実施される研究中間発表会または修士論文発表会
目標達成を測定する指標	毎年度末に実施する大学院生へのアンケート（専攻独自の調査） 専攻内会議における専攻教員へのヒアリングとその議事録
自己評価 （☑を記入）	■　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生のプレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を高めるために大学院セミナー（学生担当）を全期期間中に12回実施した 教員によるセミナーを6回実施した。 博士前期学生はポスターによる研究中間報告会を実施し、全員にフラッシュタイムで研究紹介をした後で、自由討論の時間を設定した。博士後期学生は口頭発表を実施し、現状の問題点と研究の将来性について指導教授および学科教員との討論を交えて話し合うことができた 修士論文発表会を実施し、全員の研究成果について積極的な質疑応答ができた
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学院セミナーを開催することにより、専修をこえた学生同士の意見交換が可能となり、指導教員以外の教員による研究の助言が可能になった。また、前期課程学生に対して後期課程の進学を勧めることができた 他専攻の教員の参加があり、有意義な質問と助言を得ることができた 学部学生のセミナー参加が多数あった
	【特色】 院生および教員の間で研究に対する意識や方向性を共有できた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 大学院セミナーを12回実施し、24人在籍している学生の1回の平均参加率はおよそ46%であったこと。また、専攻内教員の参加率は低いこと
	【課題】 継続的に学生セミナーおよび教員セミナーを開催し、活発な意見交換と、研究理念の構築を進める
根拠資料名	◆セミナー開催記録（資料1）、◆研究中間発表会実施記録（資料2）、◆修士論文発表会記録（資料3）

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	バイオセラピー学専攻で展開される研究の相互理解を図る
実行サイクル	＿＿1＿＿年サイクル（平成　３０年～　３１年）
実施 スケジュール	毎月定期的に大学院セミナーを実施する。専攻の全教員、全院生が一堂に会し各回の担当院生が各自の研究について発表し、科学的議論による研究の相互理解を図る。
目標達成を測定する指標	専攻内会議における専攻教員へのヒアリングとその議事録
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ■　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院セミナーにおいて各研究発表に対しレジュメを提出させ、参加者の研究に対する理解の推進を図った。各セミナー終了後、専攻内教員を含めた自由な討論時間を設定した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員間および学生間で、各院生の研究の把握が進んだ
	【特色】 指導教員以外の教員の意見や発想などを院生が学ぶ機会ができた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 大学院セミナーを 12 回実施した。24 人在籍している学生の 1 回の平均参加率はおよそ 46%であったこと。また、専攻内教員の参加率が低いこと
	【課題】 学部生や院生の参加を喚起することとともに、専攻内の教員の参加を促す
根拠資料名	◆セミナー開催記録（資料 1）、◆専攻会議議事録（資料 5-1、5-3）

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	専攻の教育研究の宣伝による大学院進学者の充実
実行サイクル	1　年サイクル（平成　２９年～　３１年）
実施 スケジュール	学部学生が一堂に会する機会を利用して大学院教育の意義と魅力を説明する 大学院セミナー、中間発表会、修士・博士論文発表会の周知と積極的参加の呼びかけ
目標達成を測定する指標	大学院セミナー、中間発表会、修士・博士論文発表会の学部生の出席者数 大学院進学者数の増減
自己評価 （☑を記入）	■　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院セミナーを 12 回実施した 入試説明会の開催を実施した 今年度の大学院入試の結果は、推薦入試受験者２名、I 期入試受験者前期課程４名・後期課程２名（合格者：前期課程３名、後期課程２名）、II 期入試受験者前期課程２名・後期課程１名（合格者：前期課程２名、後期課程１名）であった
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学院セミナーを開催することにより、専修をこえた学生同士の意見交換が可能となり、指導教員以外の教員による研究の助言が可能になった。また、前期課程学生に対して後期課程の進学を勧めることができた
	【特色】 院生および教員の間で研究に対する意識や方向性を共有できた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への 課題	【問題点】 大学院セミナーへの参加を学科・専攻を問わず学生参加を掲示にて開示したが、当専攻学生以外の学生参加はない
	【課題】 学部生の参加を推進するための対策が必要である。学部授業内や各研究室における専攻実験・実習において大学院セミナーへの参加を促すなどの対策として挙げられる
根拠資料名	セミナー開催記録（PDF）、◆入試説明会実施記録（資料 5）、◆大学院進学者数の推移、◆中間発表会及び修士・博士論文発表会実施記録等（資料 2、資料 3）

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名	農学研究科
学部長・研究科委員長名	上原　万里子
学科名・専攻名	バイオサイエンス専攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	研究室という集団の中で、研究、実習を行うことでコミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性や対人関係の構築力を養うと共に、各個人の独自性、創造性を発掘する。	最先端の知識、技術を習得する中で、自ら情報を収集する能力、問題解決能力を養う。	自らの研究内容を自在に発信・討論できる能力を養成する。
実行サイクル	２　年サイクル（平成３０年～３１年）	２　年サイクル（平成３０年～３１年）	２　年サイクル（平成３０年～３１年）
実施スケジュール	分野ごとの特論実験（一）、（二）において研究室内での実験実習、担当教員とディスカッションを通じて教育指導を実施する	分野ごとの特論（一）、（二）において基礎的な知識や最新の研究の動向を理解すると共に、学会、研究会に参加する。	研究室ごとに開講・実施されるプレゼンテーション法において、プレゼンテーションの基礎を学ぶ。また研究成果を国内外の学会、研究会で発表する。
目標達成を測定する指標	研究室での活動率、および中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。複数の教員で各大学院生の進捗を把握すると共に、適切な指導を行う。	中間発表会、修士・博士論文発表会で判断する。また学会、研究会で得られた情報を教員と共有する。	中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。また学会での発表も評価の指標とする。
自己評価（☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	自らの情報収集をもとに新たな課題の提案などもあり、また問題解決を行うためのコミュニケーション能力も十分に示された。	積極的な学会発表、参加を行った。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 研究（研究室活動）が主であるため、院生同士での繋がりが密である。	【長所】 異分野の教員との積極的なディスカッション。	【長所】 年２回程度の外部での発表を目指している。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	中間発表会、修士・博士発表会プログラム	中間発表会、修士・博士発表会プログラム、発表学会リスト	中間発表会、修士・博士発表会プログラム、学会発表者リスト

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	生命科学分野における先端研究を推進させる為に、国内外での研究動向、情報をいち早く収集する。	先端研究の推進には、先端技術を駆使した機器および試薬の使用が必須であるため、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	学術論文の投稿だけでなく、一般向けの講義、講演会やインターネット、出版物を通じて研究成果を発信する。
実行サイクル	２　年サイクル（平成３０年～３１年）	２　年サイクル（平成３０年～３１年）	２　年サイクル（平成３０年～３１年）
実施 スケジュール	学会、研究会に参加しこれらの情報収集に役立てる。また有益な情報は学科教員間で情報交換する。	原則として、教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請する。	学内、学外での模擬講義、出張講義、講演会を実施する。Web上での情報発信を行う。
目標達成を測定する指標	学会、研究会への参加状況を確認する。	外部資金申請者、獲得者を確認する。	投稿論文数、模擬講義、講演の回数を確認する。ホームページのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	全員ではないが外部資金の獲得状況は良好である。	状況は良好である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 他分野の研究者同士での積極的な交流が可能。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名	学会、研究会への参加状況	外部資金申請、獲得状況	論文リスト、模擬講義実績、講演会実績

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①	②
目　標	本専攻での研究成果を海外に発信する。	生命科学分野の教育・研究を通じてグローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換のできる人材を育成する。
実行サイクル	２　年サイクル（平成３０年～３１年）	２　年サイクル（平成３０年～３１年）
実施スケジュール	国際学会への参加を奨励する。また研究成果を英語の論文としてまとめ発表する。	英語によるプレゼンテーション研修を実施する。国際協力センターの留学プログラムの周知と短期留学を奨励する。これに加えて海外でのインターンシッププログラムを企画する。
目標達成を測定する指標	国際学会への参加回数、論文掲載数を確認する。	英語プレゼン研修については発表会を行い成果を評価する。留学プログラムおよびインターンシップの参加状況を確認する。
自己評価（☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明		
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際学会参加数、掲載論文数	外国人講師による講義、短期海外研修

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　農芸化学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	農芸化学学問領域の体系的教育の実施と学生の質の向上 １）広範な知識の効率的学習支援 ２）プレゼンテーション能力向上
実行サイクル	1 年サイクル（平成　３１年～　３１年）
実施 スケジュール	１）様々な観点から農芸化学領域に関する知識を得るための大学院特別講義の開催 ２）外部講師によるプレゼンテーション講習会 ３）大学院研究成果中間発表会（M1）の定期的な実施
目標達成を測定する指標	１）講義出席・レポート作成状況を把握する ２）教員、大学院生間の成果発表会の内容審査を集計し、表彰する
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院特別講義およびプレゼンテーション講習会を実施した。学生の出席状況は問題なく、プレゼンテーションのスキル向上も認められた。博士前期課程１年生による研究成果中間発表会は１月に行われた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 プレゼン講習会は少人数制であり、きめ細かい指導が可能
	【特色】 知識のインプットから成果のアウトプットまでの指導が一貫している
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	プレゼンテーション講習会実施記録（資料 C)、研究成果中間発表会実施記録（資料 A）

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	大学院生が関わる研究活動の活性化と研究成果発信の推進
実行サイクル	1 年サイクル（平成　３１年～　３１年）
実施 スケジュール	１）指導教員との定期的な研究内容の打合せ、ゼミの充実 ２）国内外で開催される関連学会への参加・成果発表、論文発表
目標達成を測定する指標	大学院生が関わる研究成果の学会発表数と投稿論文数を継続調査する。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院生が関わる研究成果の学会発表数：74 件 大学院生が関わる研究成果の投稿論文数：9 報
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし 【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし 【課題】 学会発表数・投稿論文数を継続して調査する必要がある。
根拠資料名	学会発表・論文投稿実績（資料 E）

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	大学院「農芸化学専攻」受験者数の増加
実行サイクル	1　年サイクル（平成　３１年～　　３１年）
実施 スケジュール	１）HP と入試説明会などで「農芸化学専攻」を広くアピールする ２）学部１年次開講の「フレッシュマンセミナー」で大学院進学の意識付けを行う
目標達成を測定する指標	大学院「農芸化学専攻」受験者数を集計、継続調査を行う。
自己評価 (☑を記入)	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	１期試験では、令和２年度入学の博士後期課程２名、博士前期課程 36 名が受験した。２期試験は博士前期課程６名が受験した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 １年生の大学院に対する意識調査を継続的に実施する必要がある
根拠資料名	◆農芸化学専攻志願者数表、2019 年度農芸化学科１年生に対する大学院進学意識調査アンケート（資料 D）

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　醸造学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を通じて、各専門分野における確かな知識と技術を修得する。	プレゼンテーション法を通じて口頭発表を行う能力を高める。	博士後期課程への進学者を確保する。
実行サイクル	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）
実施スケジュール	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を実施するとともに、最新の知見、技術の導入により内容の充実化を図る。	博士前期課程 2 年の学生を対象に中間発表会(ポスター形式)および最終発表会(口頭発表)を実施する。また、大学院全体で開催されるポスター発表会への参加を促す。	醸造学専攻特別講義を 1 年間に 2 回開催し、研究職の魅力をアピールする。
目標達成を測定する指標	専攻内の研究発表、学会発表、就職状況から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。	ポスターおよびスライドの完成度、プレゼンテーション技術、質疑応答の状況から総合的に判断する。	博士後期課程進学者数から評価する。
自己評価（☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	特論科目の受講と併せて、国際学会を含む、各種学会等への活発な参加を通じて最新の知見を修得できている。	ポスターによる研究発表会（6 月 27 日）と口頭発表による最終発表会（2 月 13 日）を専攻内で実施し、発表と質疑応答の訓練と実践を通じて、プレゼンテーション能力が向上している。また各種学会へ積極的に参加している。	醸造学専攻後期課程への進学者は 1 名であり、近年の実績（昨年 2 名、一昨年 4 名）からは少なかった。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 学科と専攻において最新の分析機器を運用することで、新しい技術の修得にも力を入れている。	【長所】 ポスター発表と口頭発表の両方を専攻全体で実施することで、プレゼンテーションに関する能力を広く身につけることができる。	【長所】 なし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 担当研究室が 2 名体制となるなど、開催する余裕が確保できない場合があった。
	【課題】 新カリキュラムとなり、これまでとは異なる科目が開講されることから、円滑かつ教育効果のある実施が求められる。	【課題】 特になし	【課題】 例年、特別講義担当の研究室を決めているが、担当以外の研究室で実施できるよう、柔軟な運用が望ましい。
根拠資料名	◆資料包括①	◆中間発表会実施記録（資料包②）、◆最終発表会実施記録（資料包③）	

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	学科・専攻共通機器の効果的運営のための基盤整備	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 30 年～34 年）	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）
実施スケジュール	ワーキンググループを立ち上げ、学科・専攻共通機器を運営するためのルールを策定する。策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	ルールを策定し、既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。	学会発表は、専攻で年間 20 件以上を目標とする。 外部資金申請は、専攻で年間 5 件を目標とする。 できるだけ Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	専攻全体として、年間 5 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価（☑を記入）	☐ 達成した ☑ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☑ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☑ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	新研究棟に、これまでなかった共通機器室を設置することとし、そこに共通機器としてドラフト、LC-TOF/MS 及び原子吸光光度計を配置した。	日本生物工学会、醸造学会などでの学会発表や関連学術誌への投稿を積極的に行っているが、発表件数は 18 件であり、目標を 2 件下回った。外部資金申請は 13 件と目標を 2 倍以上上回った。また、論文については、関連業界において重要な雑誌や IF が高い雑誌（IF=3.78、3.57）への投稿も多く（論文発表件数 14 件)、目標を達成した。	一研究室当たり、公的機関、企業との共同研究が 13 件あり、達成していると考えられる。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 共通機器室は拡張性を持たせてあり、さらに新しい機器を設置することができるようにしている。	【特色】 特になし	【特色】 醸造関連企業との連携のみならず、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 新研究棟への移転に伴い、共通機器室を設置するため、その運用についての継続的な検討が必要である。	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名		◆学会発表、論文投稿、外部資金申請実績（資料包①)、	

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　　　農学研究科
学部長・研究科委員長名　　　上原　万里子
学科名・専攻名　　　食品栄養学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	教育の可視化を図るため、カリキュラムポリシーに沿って体系化されたカリキュラムを構築する。
実行サイクル	3　年サイクル（平成　29 年～31 年）
実施スケジュール	本専攻において新たに制定したカリキュラムポリシーを達成するため、平成 30 年度からのカリキュラム内容の抜本的な見直しを行い、「食品栄養学特論」と「人間栄養学特論」を必修科目として配することで、初期の段階での食品栄養学の幅広い専門的基礎知識や技術、研究手法を主体的に修得することを可能にするとともに、「食品栄養学特別演習」、「食品栄養学特別実験」をⅠ～Ⅳに細分化して段階的に目標を定めて実施することで論文作成プログラムの体系化を進め、教育の可視化を図る。
目標達成を測定する指標	(1) シラバスへのアクセス数を現状との比較により確認する。 (2) 学生による授業アンケート結果により評価する。
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	博士前期課程科目に対する学内アクセス数は 0～67 であった。しかし、新カリキュラムに該当する博士前期課程の学生数は 3 名と昨年と同じく少ないため、前年度との比較を適切に行うことが難しいと考えられる。2019 年度前学期の授業アンケートの結果、「そう思う」、「ややそう思う」という回答が 91～100%であり、当該カリキュラムが肯定的に捉えられていると考えられる。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 目標達成を測定する指標 (1) においては、在籍者数に変動すると考えられ、正確な指標とは言いにくい。
	【課題】 目標達成を測定する指標 (1)については、「1 人当たりのシラバスアクセス数」等により適切な指標を示す必要がある。
根拠資料名	◆シラバスアクセス数（資料 15）、◆授業アンケート結果

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の取得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	1 年サイクル（平成　31 年～　　　年）
実施スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会に参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌に投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測定する指標	達成度を判断するための指標としては、 （1）教員の学会発表演題数 （2）学術論文掲載数 （3）外部資金への申請数 などを確認し評価する。
自己評価（☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	各教員の学会発表演題数、学術論文掲載数、外部資金への申請数は一定数認められたことから、研究活動が適切に推し進められている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	2019 研究活動報告（資料 16）

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	学部からの研究継続による専攻の研究力向上と大学院における入学定員を十分に確保するために内部進学率の向上を目指す。
実行サイクル	1 年サイクル（平成　31 年～　　　年）
実施スケジュール	(1) 学内推薦入試を実施する。 (2) 大学院特別講義への学部生の参加を促すことで、研究に対する意識付けに繋げる。 (3) 卒業論文研究への早期着手による大学院進学への意識付けを積極的に行う。
目標達成を測定する指標	(1) 大学院特別講義への学部生参加者数により評価する。 (2) 内部進学生により評価する。
自己評価（☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	学内推薦入試を導入し、2 名の応募者があった。専攻内会議において、令和 2 年度推薦入試の応募要件などを再検討し、次年度は GPA2.70（現行 GPA2.7）以上の条件で行うこととした。大学院特別講義への学部生の参加は一定数認められ、研究に関する意識付けは部分的になされたと考えた。また、全学的な取り組みである大学院生のポスター発表会への学部学生の参加を促したところ、一定数の学生の参加が認められた。本年度の受験者数・内部進学者数は昨年度よりも増加し、合格者数は入学定員を満たした。卒業論文研究への早期着手に関しては、各研究室の事情などもあり、バラツキがあった。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 卒業論文研究への早期着手は、各研究室にバラツキがあった。
	【課題】 卒業論文研究への早期着手に向けて各研究室は努力する。
根拠資料名	2019 食品栄養学専攻特別講義一覧（資料 1)、◆内部進学者数、進学者数等、◆専攻会議での検討を示す議事録・資料（資料 17）

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　　農学研究科
学部長・研究科委員長名　　上原　万里子
学科名・専攻名　　林学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②
目　標	大学院の講義・実験実習における成績の評価に関する標準化	AP および DP に対応した大学院生の研究成果の構築とプレゼンテーションと論文発表力の向上
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）	4 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）
実施スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策（改善点）の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会（所信・中間・最終）の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、試験研究計画と実施・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施
目標達成を測定する指標	①相対評価を実施する教員数（比率） ②相対評価を実施する科目数（比率）	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価
自己評価（☑を記入）	☐ 達成した ☑ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☑ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	大学院生が他大学院に進学、グローバル推進企業に就職する場合、GPA の提出を求められることが散見される。将来的には、学部と同様に大学院に GPA を導入すべきであり、大学院教学検討委員会にて GPA 導入を検討することとなった。	研究成果公表のための要旨の電子化を推進し、学術専門分野における学協会登録団体主催の年次大会での研究発表能力を向上させている。専攻内の全研究室では、研究成果を定期的にプレゼンテーションさせるとともにプレゼンテーション能力、データの統計解析法の向上を意図した指導を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 博士前期課程の最終報告会での発表と質疑応答を審査し、指導教授による研究の位置づけと特色、学術専門分野における評価と必修科目の成績を相対的に評価している。	【長所】 学会発表要旨、PowerPoint 原稿や論文投稿のための論文執筆能力向上を意図した指導を実施している。
	【特色】 研究成果報告会（所信・中間・最終）を専攻内で公開にて実施し士気向上を図っている。	【特色】 一部の研究室では、日本語のみならず、英語によるプレゼンテーション能力の育成に努めている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 専門性の観点からすべての開講科目において教員が相対評価を実施することは困難である。	【問題点】 院生満足度調査の回答率がやや低く完全実施と意見の聴取が不十分である。
	【課題】 引き続き GPA 導入を検討する。	【課題】 院生満足度の把握をきょうかするとともにその結果に反映した指導を展開できるようにする。
根拠資料名	大学院カリキュラム、大学院シラバス、所信、中間、最終報告会講演要旨集	大学院カリキュラム、大学院シラバス、、所信、中間、最終報告会講演要旨集、大学院発表会の評価結果

２．研究に関する総合的事項

	①	②
目　標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	森林科学、木質科学分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積(研究連携の推進)
実行サイクル	4　年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）	4　年サイクル（平成　29 年～　32 年）
実施スケジュール	①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への学生確保の確認 ②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定 ③制度への申請準備支援 ④制度への申請	①競争的資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画・実施の策定 ②競争的資金等の獲得および日本学術振興会特別研究員採択に向けた活動・行動 ③資金・予算獲得できた研究の実施 ④成果の取りまとめと社会化
目標達成を測定する指標	①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率	①競争的資金等の獲得の有無 ②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	進学者数が少なく在籍者のうち研究支援制度への応募もわずかであった。	専攻外の連携については、個々の教員・院生が共同研究を実施しており成果をあげている。研究室によっては、教員が実施している研究課題の成果発表と今後の課題について講演会を実施しているが、専攻全体における足並みはそろっていない。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 課程博士、論文博士の学位申請が可能であることから就職後に論文を提出して研究成果により学位を取得するシステムは構築されている。この制度の利用希望者は多い。	【長所】 客員教授や海外からの連携研究者からのプレゼンテーションや特別講義が各研究室で多く実施されている。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 景気の動向から大学院進学よりも就職への希望者が多い。この点が進学率問題に起因する。	【問題点】 事務的用務や研究外業務の調整を図り研究に充てる時間の確保が困難な場合や時期が多く存在する。
	【課題】 進学数を増やすため、指導教授や分野に関する研究者のアドバイスや魅力発信が必須である。	【課題】 研究課題作成および問題解決能力を向上させるための勉強会を継続的に開催する必要がある。
根拠資料名	博士後期課程進学者数（進学率）	大学 HP の教員紹介

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	林学専攻の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	4　年サイクル（平成29年～令和2年）	4　年サイクル（平成29年～令和2年）	4　年サイクル（平成29年～令和2年）
実施スケジュール	①現行研究科の検討と問題点の抽出 ②森林総合科学科の教育課程改革との関係性の検討 ③上記①と②を踏まえた専門分野の見直し（内容、名称、科目等） ④農学研究科専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出	①大学院生の生活実態の把握 ②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集 ③大学院生への奨学金申請の促進	①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。 ②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。 ③適宜、指導教員による進路相談を実施する。
目標達成を測定する指標	①　令和3年4月に新たな研究科が整備されること	①学外奨学金応募者数 ②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合 ③外部の研究支援制度（学振等）への応募支援	①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	令和3年度からの新研究科体制に改革する整備を行った。	博士前期課程については大学院入学前に奨学金に応募するよう指導しており、希望者は全員応募した。	就職希望の院生は、指導教員が就職指導とキュリアセンターからの情報により夏季休暇中のインターンシップへ参加した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 インターンシップへの興味は一部の学生のみに限られること。
	【課題】 修士(農学)、博士(農学)への学位名称変更による就職や社会活動における利点を明確に広報することが必要である。	【課題】 学生支援に対する都道府県や民間企業の奨学金や助成制度の情報発信を計画的に実施すること。(例えば江間忠木材基金など)	【課題】 特になし
根拠資料名	文科省への事前相談資料	奨学金推薦資料	インターンシップ参加者数の報告

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

研究科名　農学研究科
研究科委員長名　上原　万里子
専攻名　農業工学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	博士前期課程におけるシラバスに基づいた院授業の実施
実行サイクル	1 年サイクル（平成 31 年度）
実施 スケジュール	前期　4 月~7 月　シラバスに沿った院授業の実施 後期　9 月~1 月　シラバスに沿った院授業の実施 12 月~1 月　令和 2 年度院授業シラバスの策定
目標達成を測定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果を指標とする。
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	ほぼシラバスに基づいて授業が行われた（資料 1-1）。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 シラバスを重んじることで、教育内容の見直しが可能になる。 【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 大学院生は個々人でテーマを持って研究をしていることから、シラバスで履修生全員に共通の課題を課すことは研究の進展の妨げになる場合がある。 【課題】 履修生が予習や復習に多大な時間を費やすことなく有用な知識や技術を習得できる課題の選定を行うこと。
根拠資料名	平成 31 年度大学院シラバス（資料 1-1） 授業実施報告書（資料 1-2） 2019 年度前学期東京農業大学大学院農学研究科授業評価アンケート集計結果（資料 1-3）

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	博士後期課程の大学院生に対する国際会議での発表の推奨
実行サイクル	1 年サイクル（平成 31 年度）
実施 スケジュール	4 月から適時、農業工学分野における国際会議の情報を博士後期課程の大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測定する指標	平成 31 年度中、発表数／在籍院生数で 1 を目指す。
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	対象となった国際会議は、カンボジアで開催された International Conference on Environmental and Rural Development 2020（2/28~3/1）であったが、発表者は 1 名であった。新型コロナウィルス感染対策で辞退した学生が 3 人いた。博士後期課程在籍者は 7 人であることから、指標で示すと 4/7 であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材の輩出が可能になる。
	【特色】 世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材の輩出が可能になる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 国際会議は国内だけでは不十分なため、渡航費の確保が難しいこと。
	【課題】 東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラムの予算が限られており十分とは言えない。
根拠資料名	国際会議のプロシーディング（資料 2-1） 2019 年度「東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラム採択結果表」（資料 2-2）

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	農業工学分野におけるグローバル学術リーダー育成プログラムの実施
実行サイクル	1 年サイクル（平成 31 年度）
実施スケジュール	採択後、6・7 月からグローバル学術リーダー育成プログラムを開始し、9 月に富士農場に英語による研究発表・交流会でサマーキャンプを実施する。併せて農業工学分野における国際会議の情報を博士後期課程の大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果および英語論文の投稿数を指標とする。
自己評価（☑を記入）	□　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 ☑　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	前年度実施した学内の教育プログラムの募集が今年度はなかったことから、前年度計画した、学内での講習会およびサマーセミナーは予算上の問題から実行できなかった。 前年度のサマーセミナーで実施したポスターセッション「国際会議におけるエクスカーションの実施案」で、最優秀賞を取った企画案「クッキングセミナー」を学科内の施設で実施した。 クッキングセミナーは、参加者がチームを作り、自国の料理を実際に調理して英語でアピールし試食する形でコンテストを行うもので、レシピの決定、メニューボードの作成、食材の調達、調理、プレゼン、試食会、投票を行った。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 言語を問わずコミュニケーションを行うことができるようになる。
	【特色】 レシピの決定、メニューボードの作成、食材の調達、調理、プレゼン、試食会などの共同作業を通して、コミュニケーション能力、自己アピール能力を高めることができる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 参加学生の人数や国籍のバリエーションがないと成立し難い。
	【課題】 予算および実施場所、調理機材の確保。
根拠資料名	サマーセミナーで作成したポスター（資料 3-1） クッキングセミナースケジュール（資料 3-2） 実施報告議事録（資料 3-3）

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２（造園学専攻）

学部・研究科名　大学院農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　造園学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	デイプロマポリシーに基づく、カリキュラムプログラムの「質」の向上
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年 4 月～31 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の最終年度）
実施 スケジュール	カリキュラム・ポリシーに基づき、院生に教育目標を充分に周知すると共に、必修科目「造園学総論」において、造園学の形成発展など、建学の精神に基づく教育理念を共有する。また平成 29 年度より、新カリキュラムに移行しており、今まで以上に専門分野の深化を主眼としたカリキュラムプログラムの構築と実施を行う。
目標達成を測定する指標	大学が実施する授業評価に基づき、大学院生が求める講義・演習内容を把握する。その結果に基づき，教員が学生に伝えるべきことを教員相互で検討する。講義・演習内容とのすりあわせを十分に検討し、授業に反映する。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学が実施する授業評価を行い，その結果に基づいた講義，演習内容のすり合わせを行う。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 定期的な自己点検ができた。
	【特色】 少人数体制となっていて，大学院生と教員との緻密な交流ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 在籍数が少ないことによってできた指導体制ともいえる。
	【課題】 数値では表すことの難しい教育内容が時にみられる（例えば，論文執筆の進捗停滞時の指導など）。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆授業評価アンケート⑨、◆授業評価アンケートに対する改善計画書⑩

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	院生の研究意欲の向上と修士（博士）論文（制作）の質的内容の深化
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年 4 月～31 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の最終年度）
実施 スケジュール	博士前期課程：造園学会全国大会（毎年 9 月に申込），関東支部大会（12 月実施），その他樹木医学会や芝草学会等関連学会への投稿数を増やす。博士後期課程については，国際学会（ワークショップ）への参加，論文の投稿数を増やす。
目標達成を測定する指標	論文検討会、公開研究発表会の実施、関係研究機関での口頭発表・論文発表会への参加。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	本年は，昨年度に続き「教育改革推進プロジェクト」経費によって外国人教員や協定校の大学院生の招聘を行った。，国内外の研究情報を取り入れた他，国際学会への発表件数の増加を図った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 「教育改革推進プロジェクト」の経費は主に外国人招聘と，大学院生の学会等への発表数の増加を図ることを目的としている。
	【特色】 国際化が叫ばれている中，日本の造園の特徴を引き出す。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 専門学（造園）に関わる国際学会やワークショップが年々増加している状況の中，その重要性や意義について十分に啓発されていない。
	【課題】 経費等も勘案しながら国際学会（ワークショップ）への参加数も今後増やしていく。
根拠資料名	◆論文検討会、公開研究発表会の実施記録④、◆関係研究機関での口頭発表・論文発表会への参加実績⑦、◆論文投稿実績⑦、◆「教育改革推進プロジェクト」関連書類⑪

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	産・官・学の連携による大学院教育・研究活動の推進と発信
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年 4 月～31 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の最終年度）
実施スケジュール	グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる能力を養うために、フィールドワークなど（国内外）を通じて授業・研究に相互に反映する。
目標達成を測定する指標	大学院再編（地域環境科学研究科の設置）に伴うカリキュラム改正や，人員配置，国際化を目指した教育・研究成果の HP を通じての外部発信。
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	国際化への対応の一つに，2019 年 6 月には，ホフストラ大学（USA）から教員を招聘し，講義を行った。2019 年 10 月には中国北京林業大学から教員 1 人と大学院生 2 人を招き，本学大学院開講授業に出席した。2020 年 2 月には，オスナブリュック応用科学大学から教員 1 人と学生 12 人の受入れ，特別講義を行った。いずれもただ講義を行うだけでなく，本学大学院生と来校の大学生とが交流する機会も設けた。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 国際化を図りつつ，フィールドワークを通じた授業・研究を充実させた。
	【特色】 学部間協定校との MOU 締結後，教育・研究に活かすことのできた実質的な成果である。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 国際化を視野に入れた産・官・学の連携の理解はまだ十分とはいえなかった。
	【課題】 国際化を視野に入れた産・官・学の連携の現状の把握と啓発が必要である。
根拠資料名	◆中国北京林業大学来校による共同授業の実施記録 https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/topics/23964/ https://mp.weixin.qq.com/s/MufXaJVByf3wRgJwPvIaug)

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書　　　　様式２

学部・研究科名　大学院農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　国際農業開発学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	自然科学および社会科学にわたる広範な学問領域を統合する総合的アプローチにより、農業開発や国際協力にかかわる問題の解決を図るための論理的な思考力と実践力を持つ	異なる文化や習慣を尊重した活動を展開できる人材を育成する	国内外の農業開発ならびに国際協力分野でリーダーシップをもって活躍できる人材を育成する
実行サイクル	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施スケジュール	自然科学と社会科学の両領域で、それぞれ基幹となる必修科目を履修し、総合的な知識を修得するとともに、農業開発や国際協力にかかわる諸問題や研究手法について学ぶことを目的とし、各研究領域をカバーする座学科目および実験・演習科目ならびにフィールド調査を選択科目として履修する。	他国の文化・社会・習慣などの多様性に十分な知識と理解を有し、柔軟な思考力と判断力、さらにコミュニケーション力を身につけ、演習・実験を通して国内外のどの地域でも自己の能力を発揮して社会に貢献することができる能力を養う。	特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などを実施し、国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在としてリーダーシップを発揮できる能力を養う。
目標達成を測定する指標	カリキュラムの実施状況	専攻の全指導教授または指導准教授が出席し、発表者に対してコメントや意見を述べる専攻内研究発表会の開催状況。	特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などの実施状況。
自己評価（☑を記入）	☑ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☑ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☑ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	すべてのカリキュラムを適切に実施した。	院生発表会は予定どおり前学期に１回実施した。 後学期にも実施する予定である。	国内外におけるフィールド調査は５名程度の院生が実施した。 特別講義とインターンシップは今のところ実施していない。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、授業以外で院生とコミュニケーションをとる時間が十分に確保できない。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆授業実施報告書	◆専攻内研究発表会実施記録、 ◆大学院留学生	◆特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などの実施報告書

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	国内外の農業・農村開発の現場におけるさまざまな問題解決に貢献する課題解決型研究の推進	農業・農村開発を通じて国際的に活躍する人材を育成するため、国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施	国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在として活躍する人材を育成するため、地域・社会と連携した研究活動の実施
実行サイクル	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施スケジュール	学内外の競争的資金を獲得し、研究プロジェクトを実施する。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究を実施する。	地域・社会と連携した研究を実施する。
目標達成を測定する指標	研究プロジェクトの実施状況。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施状況。	地域・社会と連携した研究活動の実施状況。
自己評価（☑を記入）	☑ 達成した □ 一部達成した □ 達成できず要継続 □ 達成できず目標の変更	☑ 達成した □ 一部達成した □ 達成できず要継続 □ 達成できず目標の変更	□ 達成した ☑ 一部達成した □ 達成できず要継続 □ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	専攻教員 15 名中 10 名がのべ 20 件（学内 5 件、学外 15 件）の競争的資金を獲得し、研究代表者・研究分担者・プロジェクトマネージャーなどとして研究課題を遂行している。	専攻教員 15 名中 7 名がのべ 20 件（国内 6 件、国外 14 件）の連携研究を実施している。	専攻教員 15 名中 5 名が国内外でのべ 7 件の人材育成に関わる研究活動を実施しており、この研究活動は国内外の地域・社会との連携が伴う内容となっている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、研究プロジェクトを実施する時間が十分に確保できない。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、連携研究を実施する時間が十分に確保できない。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、地域・社会と連携した研究活動を実施する時間が十分に確保できない。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆科研費など競争的資金獲得状況	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究

３．その他に関する総合的事項

	①	②
目　標	地域社会と連携した取り組みを推進する。	民間企業などと連携した取り組みを推進する。
実行サイクル	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施スケジュール	地域社会と連携した取り組みを実施する。	民間企業などと連携した取り組みを実施する。
目標達成を測定する指標	地域社会と連携した取り組みの実施状況。	民間企業などと連携した取り組みの実施状況。
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	専攻教員 15 名中 6 名が国内外で実施する研究活動は、地域社会と連携して実施している。	専攻教員 15 名の民間企業と連携したとりくみの該当はなかった。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、地域社会と連携した取り組みを実施する時間が十分に確保できない。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、民間企業などと連携した取り組みを実施する時間が十分に確保できない。
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究	

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　　農学研究科
学部長・研究科委員長名　　上原　万里子
学科名・専攻名　　農業経済学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	大学院生が的確かつ体系的に情報を整理する能力と論理的思考能力を醸成するため、プレゼンテーション法、論文作成法、総合演習を実施し、教育力の向上を図る。
実行サイクル	1 年サイクル（平成 31　年～　　年）
実施 スケジュール	第１回総合演習の実施（６月） 第２回総合演習の実施（11 月） 第３回総合演習の実施（12 月） 第４回総合演習の実施（１月） プレゼンテーション法・論文作成法（随時）
目標達成を測定する指標	①各総合演習の報告資料 ②プレゼンテーション法・論文作成法の受講者数
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 【課題】
根拠資料名	◆総合演習の実施記録、◆プレゼンテーション法・論文作成法の受講者数及び実施記録

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	農業経済学専攻では、大学院生が社会科学の専門領域における知識と研究能力を修得することを目標としており、各専門領域の学会で、教員との共同研究を含め研究発表や学会誌への投稿を行い、研究力の向上を図る。
実行サイクル	１年サイクル（平成　３１年～　　　年）
実施 スケジュール	各専門領域の学会発表・学会誌への投稿（随時）
目標達成を測定する指標	①大学院生の学会発表、学会誌投稿・受理の状況
自己評価 (☑を記入)	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 【課題】
根拠資料名	◆学会発表、学会誌投稿・受理状況

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	近年、農業経済学専攻では入学者が少ない傾向にある。博士前期課程、博士後期課程ともに、入試受験者確保に向けて努力する。
実行サイクル	1年サイクル（平成　３１　年～　　　年）
実施 スケジュール	第１回大学院入試説明会の実施（５月） 第２回大学院入試説明会の実施（６月） 学内推薦入試（５月） １期入試等（７月） 第３回大学院入試説明会の実施（11 月） ２期入試等（１月）
目標達成を測定する指標	①各入試説明会の参加者数 ②各入試受験者数
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和２年度推薦入試の実施について検討を行い、令和２年度の５月下旬に実施することになった。また、GPA が 2.0 以上とする条件を追加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 【課題】
根拠資料名	◆入試説明会実施記録（参加者数）、◆入試志願者数

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　　　　　　農学研究科
学部長・研究科委員長名　　　上原　万里子
学科名・専攻名　　国際バイオビジネス学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②
目　標	大学院の講義における成績の相対評価化 （将来的な GPA 導入の環境整備）	AP/DP に適合した大学院生の研究・プレゼンテーション能力の向上
実行サイクル	4 年サイクル（平成　29 年～　32 年）	4 年サイクル（平成　29 年～　32 年）
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策（改善点）の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会（中間・最終）の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、新たな研究・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施
目標達成を測定する指標	①相対評価を実施する教員数（比率） ②相対評価を実施する科目数（比率）	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	学生が海外の大学院に進学を希望する場合、GPA の提出を求められることがある。このため、将来的には大学院に GPA を導入すべきであると考え、大学院教学検討委員会にて GPA 導入を検討することとなった。	研究報告のためのレジメのフォーマット化（日本語・英語）を推進し、学外における研究発表原稿作成能力を向上させている。一部の研究室では、研究成果を定期的にプレゼンテーションさせるなど、プレゼンテーション能力の向上を意図した指導を行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 博士前期課程の最終報告会を審査し、審査結果に基づき必修科目の成績を相対評価している。	【長所】 学会報告資料や論文投稿のための論文作成能力向上をはかっている。
	【特色】 博士前期課程の最終報告会を学位取得のための最終口頭試験と位置づけ、院生の奮起を促している。	【特色】 日本語のみならず、英語によるプレゼンテーション能力の育成に努めている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 すべての科目・教員が相対評価を実施することは困難である。	【問題点】 学生満足度調査を実施するに至っていない。
	【課題】 引き続き GPA 導入を検討する。	【課題】 満足度を測定しておらず、次年度より計測していきたいと考えている。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、最終報告会資料 一部科目において相対評価を実施した教員数 15 人（100%）、 相対評価を実施した科目数 2 科目（6.3%）	◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、◆レジメのフォーマット、中間報告会資料、修士論文フォーマット、大学院発表会の評価結果

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

２．研究に関する総合的事項

	①	②
目　標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	バイオビジネス分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積
実行サイクル	4 年サイクル（平成　29 年～　32 年）	4 年サイクル（平成　29 年～　32 年）
実施スケジュール	①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への応募可能性の確認 ②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定 ③制度への申請準備支援 ④制度への申請	①外部資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画の策定 ②外部資金等の獲得に向けた活動・行動 ③資金・予算獲得できた研究の実施 ④成果の取りまとめと社会化
目標達成を測定する指標	①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率	①外部資金等の獲得の有無 ②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数
自己評価（☑を記入）	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	平成 31 年度は応募者がいなかった。在籍者のうち 2 名が博士後期 3 年生、1 名が社会人、1 名が留学生であり、論文作成などで多忙を極めていることから研究支援制度の応募がなかった。	外部との共同研究については、個々の教員・院生において共同研究が実施されており個々に成果をあげている。昨年度は、個々の教員が実施している研究課題の成果発表と今後の課題について勉強会を実施したが、専攻全体で統一した共同研究の構想、研究計画を行うには至っていない。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 応募数が少ない。	【問題点】 引っ越しなどの都合により勉強会を開催できていない。
	【課題】 応募数を増やすため、指導教授からの助言が必要である。	【課題】 研究課題作成のための勉強会を継続的に開催する必要がある。
根拠資料名	◆博士後期課程進学者数（進学率）	大学 HP の教員紹介

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	国際バイオビジネス学専攻教育課程の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）
実施スケジュール	①現行教育課程の検討と問題点の抽出 ②国際バイオビジネス学科の教育課程改革との関係性の検討 ③上記①と②を踏まえた専修分野の見直し（分野数、内容、名称、科目等） ④農学研究科専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出	①大学院生の生活実態の把握 ②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集 ③大学院生（＋入学予定者）への奨学金申請の促進	①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。 ②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。 ③適宜、指導教員による進路相談を実施する。
目標達成を測定する指標	①　平成 33 年 4 月に新たな教育課程が整備されていること	①学外奨学金応募者数 ②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合 ③外部の研究支援制度（学振等）への応募支援	①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	教育課程を希望する大学院生が入学していないが、令和３年度からの新研究科体制ならびに新カリにおいて、教育課程（教職科目）の整備を行った。	博士前期課程については大学院進学時（入学前）に外部の奨学金に応募するよう指導しており、留学生は全員応募した。日本人学生は応募していないが生活基盤が確立しているためと思われる。	就職希望の日本人学生（対象は１名のみ）は、指導教員が就職指導を実施し、夏季休暇中のインターンシップへ参加した。留学生はインターンシップに参加したとの報告はなかった。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 本専攻は留学生が多く、CIP より得た情報に基づき積極的に応募している	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 日本語能力が低い留学生の採択が少ない傾向にある	【問題点】 留学生の就職希望の実態把握が困難である。
	【課題】 特になし	【課題】 日本語による書類作成の指導体制ができていないため、指導教員の負担が大きい。サポート体制の構築が今後の課題である。	【課題】 留学生は帰国か日本で就職かの決断が遅いため、インターンシップの検討ができていないことが課題である。
根拠資料名	文科省への事前相談資料	奨学金推薦資料（一部のみ、個人情報につき部外秘） 奨学金応募者数５名（採択数は不明）	インターンシップ参加者数１名

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名	農学研究科
学部長・研究科委員長名	上原　万里子
学科名・専攻名	環境共生学

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	地球環境の悪化に伴う自然生態系保全やひとの生活環境への影響を削減方策など，環境共生型社会の構築を具現化するための理論や方法を探求する研究能力を有し，独創的かつ学術的な立場から社会に貢献しようとする広い視野，問題意識，強い意欲を教育する．
実行サイクル	３年サイクル（平成２９年～３１年）
実施 スケジュール	各指導教員による院生に対する個人指導の充実，専攻における院生の口頭論文発表会実施の充実（学位論文公開発表会前に中間発表会の充実），各指導教員による国内および国外学会発表の推進，国内外のおける学会誌への研究論文投稿の推進，より質の高い学位論文の作成指導について，3 年間かけて充実していく．
目標達成を測 定する指標	指導教員による綿密な研究論文指導を通して，各院生には年 2 回のスクーリング時に研究発表会および討論会を行い，専攻教員が評価する．
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	生物学，資源学および地域学を基礎とし総合的・複合的科目を通して，学位授与のための教育課程を編成し，各指導教授が研究手法を通じて研究発表能力および学位論文執筆等を体得できるように教育している．
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多様な専門を有する社会人院生が在籍するため自然・社会・人文科学が融合した総合科学分野からの視点で研究ができる．
	【特色】 環境共生に関する総合的・複合的な視野をもち高度な研究能力を有する人材を養成できる．
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 社会人院生が多く在籍するため，指導教授との相談は密に行われているが，院生同士の研究交流の機会多くする努力が必要である．
	【課題】 指導教授および院生全員による研究発表スクーリング等の機会を増やし，さらに研究交流を密にする．2020 年度、募集停止のため、今後、在籍院生全員が期間内で学位取得できるよう、専攻教員が全員で指導していく。
根拠資料名	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，ガイダンス資料 大学院海外研究発表支援プログラム ◆高等論文発表会実施記録、中間発表会実施記録、◆学会発表実績、◆論文投稿実績

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	現在の院生の半数以上は海外に眼を向けた食品流通に関する研究であることから，将来にわたり研究発表の場の国際化を推し進めるとともに，地球規模での環境共生に係わる問題研究を進める．
実行サイクル	3年サイクル（平成２９年～３１年）
実施 スケジュール	現在の院生による研究が，より質の高い成果が得られるよう専攻教員が支援しながら，年次ごとに進める．また，年度ごとに入学する院生は，環境共生学専攻の研究の進め方についても逐次理解してもらう．
目標達成を測定する指標	院生には年２回のスクーリング時に研究発表会および討論会を行い，専攻教員が評価する．さらに，国内外の学会で研究発表を行い，その評価を確認する．
自己評価 (☑を記入)	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	院生は，国内外において，研究活動および研究学会発表を実施しており，その成果を学会誌等へ掲載することを目指しており，それに対して指導教授が丁寧に指導している．
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 授業以外と時間においても，丁寧な研究および論文作成指導を実施している．
	【特色】 院生に対して，研究発表会などを通して，指導教授ばかりでなく，他の専攻教員からも，指導を行える体制を整えている．
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 2020 年度、募集停止のため、今後、在籍院生全員が期間内で学位取得できるよう、専攻教員が全員で指導していく。
根拠資料名	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，大学院海外研究発表支援プログラム ◆スクーリング実施記録、

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	社会人で，幅広く農学分野で環境共生学に関する高度な知識と独創的研究能力を学び学位論文の取得を希望者される方が多く入学できることに力を入れる．
実行サイクル	３年サイクル（平成２９年～３１年）
実施スケジュール	環境共生学専攻独自の入試制度および奨学金制度である社会人特別選抜制度を生かし，広く社会人で学位を取得希望する入学者を増やす体制を整備する．専攻独自のホームページの充実を図り，働きながら学位を３年間で所得できる特色をより PR していくとともに，専攻の指導教授の研究分野・専門性を明確にし、ホームページで公開していく．
目標達成を測定する指標	入学定員の確保（2020 年度で募集停止）
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	大学全体で発信している募集情報だけでなく，専攻独自特色あるホームページから，とくに社会で活躍している経験と知恵と研究力を学位取得につなげる指導体制を整えていることを PR し，社会人特別選抜という入試制度を活用して，働きながら３年間で学位取得できることを実施してきた．さらに，仕事の関係で３年間では取得ができない院生には，入学当初から長期履修制度により対応できるように体制を整えており，順調に実施している．また，専攻の個々の教員も積極的に学生募集を行った．
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 とくに，社会人選抜試験入試制度を主体として，働きながら３年間で学位取得できることを，専攻独自のホームページに明記し，指導体制を明確化し，院生獲得に努力している．
	【特色】 専攻独自のホームページからも，とくに社会人選抜入試での学位所得のシステムがあることを明記していること．
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 2020 年度、募集停止のため、今後、在籍院生全員が期間内で学位取得できるよう、専攻教員が全員で指導していく。
根拠資料名	専攻教員の募集活動充実、◆専攻 HP、◆入学志願者状況

2019（令和元）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　農学研究科
学部長・研究科委員長名　上原　万里子
学科名・専攻名　食品安全健康学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	プレゼンテーション能力を高める
実行サイクル	1 年サイクル（平成　31 年～　31 年）
実施 スケジュール	1. 学会での発表を積極的に行う。 2. 大学内におけるポスター発表会でのポスター作製、ポスターを用いた質疑応答を行う。
目標達成を測定する指標	1. 大学院生の学会での発表数を確認する。 2. ポスター発表会での発表数を確認する。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	１．大学院生の学会発表数は４１件であった。 ２．修士２年生１８名中、１７名が発表した。なお、１名は企業との共同研究のため、秘匿が必要なため発表できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 一人が少なくても１回以上は発表しており、またポスターあるいは口頭発表において、質疑応答を行ったことから、大学院生のプレゼンテーション能力はついたと考えている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	

２．研究に関する総合的事項

	①	②
目　標	食品安全健康学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。	様々な研究助成などからの外部資金の取得を試み、研究活動の推進につなげる。
実行サイクル	1 年サイクル（平成　31 年～　31 年）	1 年サイクル（平成　31 年～　31 年）
実施 スケジュール	1.　食品安全健康分野に関連する国内外の学会で発表する。 2.　食品安全健康分野に関連する和文誌、国際誌に投稿する。	外部資金獲得のために科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに応募する。
目標達成を測定する指標	1.　学会発表数を確認する。 2.　学術論文掲載数を確認する。	外部資金の申請数を確認する
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	１．学会発表数は 70 件であった。 ２．掲載論文数は 35 件であった。	本年度は科学研究助成費を含め 33 件の応募をし、また多くの資金を獲得できた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】 本年度も食品安全健康分野に関連する学会、学術誌に多くの発表ができ、研究成果を通して、本専攻から最先端の情報を発信できた。	【特色】 外部資金の獲得が、学会発表数、掲載論文数にも結び付いていると考えられる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】	【問題点】 研究活動の推進にさらにつなげるためには、申請するだけでなく、より外部資金を獲得できるようにすることが必要である。
	【課題】	【課題】 申請書等のレベルを上げるよう、学内で開催される獲得に関するセミナーに積極的に参加する。
根拠資料名		

３．その他に関する総合的事項

	①	②
目　標	受験者数の増加を図る	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品あるいは機能性表示食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本専攻のディプロマーポリシーにある「食品安全健康学専攻は、「食品の安全性」と「食品の機能性」の両分野において、食の安全と健康機能上の問題解決力を身につけた研究者や高度な専門職業人を輩出する」専攻であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。
実行サイクル	1　年サイクル（平成　31 年～　31 年）	1　年サイクル（平成　31 年～　31 年）
実施スケジュール	1. 食品安全健康学科学生に対して、講義等を通じて、研究の意義、研究職の魅力をアピールする。 2. 食品安全健康学科学生に対して、毎年、大学院での研究、研究職の魅力などについて、学期最初に行われるガイダンスなどを通じて PR する。とくに３年生には、就職活動を始める前、すなわち後学期始まる頃に PR を行う。 専攻説明会を３回以上行う。	1. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。
目標達成を測定する指標	1. 令和２年度食品安全健康学専攻受験者数を確認する。 2. 専攻説明会の回数、参加人数を確認する。	1. 参加学会懇親会数を確認する。 2. 問い合わせを受けた企業数を確認する
自己評価（☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	１．昨年度と同じ 23 名だった。 ２．学科内学生のための説明会（１回）も含め、説明会を計４回行い、計 35 名の学生が参加した。	１．専攻として 52 件であった。 ２．問い合わせを受けた企業は 55 件であった。 また、大学主催の企業懇談会に５名の教員が参加し、様々な企業に挨拶し、本専攻の特徴等について説明した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】 問い合わせ企業数が多くなり、多くの企業に知られる専攻になってきた。また、メディアからの問い合わせも多くなってきている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 受験生数が伸びていない。	【問題点】
	【課題】 現在は、大学院に関する説明を大学入学時の学生およびその保護者にも行っている。６月の教育懇談会の際にも、保護者に大学院進学の利点を説明している。また、説明会開催を４年生だけでなく、2，３年生にも掲示板で連絡しており、参加人数は増加しつつある。このことを今後も継続し、低学年の時から学生に関心を持たせ、さらには保護者にも大学院進学の良さを理解していただき、受験生数を伸ばしていく。	【課題】
根拠資料名		